

言狂葉照

花鏡泉

青空文庫

鞠唄

井筒

仙冠者

重井筒

野衾

峰の堂

狂言

夜の辻

仮小屋

鞠唄

一

二坪に足らぬ市まちなか中の日蔭の庭に、よくもこう生い立ちしな、
 ひともとあおかえで一本の青楓、塀の内に年経たり。さるも老木おいきの春寒しとや、
 枝も幹もただ日南ひなたに向いて、戸の外にばかり茂りたれば、広から
 ざる小路の中を横よこぎりて、枝さきは伸びて、やがて対向むかいなる、二
 階家の窓に達とどかんとす。その窓に時々姿を見せて、われに笑顔向

けたまうは、うつくしき姉上なり。

朝な夕な、琴弾きたまうが、われ物心覚えてより一日も断ゆることなかりしに、わが母みまかりたまひし日よりふと止みぬ。遊びに行きし時、その理由問いたるに、何ゆえというにはあらず、飽きたればなりとのたまう。されど彼家なる下婢の、密にその実を語りし時は、稚心にもわれ嬉しく思い染みぬ。

「それはね、坊ちゃん、あの何ですツて。あなたのね、母様がおなくなり遊ばしたのを、御近所に居ながら鳴物もいかながな訳だつて、お嬢様が御遠慮を遊ばすんでございますよ。」

その隣家に三十ばかりの女房一人住みたり。両隣は皆二階家なるに、其家ばかり平家にて、屋根低く、軒もまた小かなりければ、

おおい おう
 大なる凹の字ぞ中空に描かれたる。この住居は狭かりけれど、奥
 と店との間に一ひとつの池ありて、金魚、緋鯉ひごいなど夥多あまた養いぬ。誰が飼
 いはじめしともなく古くより持ち伝えたるなり。近隣の人は皆年
 久しく住みたれど、そこのみはしばしば家主かわりぬ。さればわ
 れその女房とはまだ新らしき馴染なじみなれど、池なる小魚こうおとは久しき
 交情なかなりき。

「小母さん小母さん」

この時髪や洗いけん。障子の透間すきまより差覗さしのぞけば、膚はだ白く肩に
 手拭てぬぐいを懸けたるが、奥の柱に凭よりかかれり。

「金魚は、あの内に居るかい。」

「居ますとも、なぜ今朝ツからいらつしやらないツて、待つてゐる」

わ、貢^{みつぎ}さん。」

「そう。」

「あら、そう、じゃありません、お入りなさいよ、ちよいと。」
「だって開^あかないもの、この戸は重いねえ。」

手を空^{そら}ざまに、我が丈より高き戸の引手を押せば、がたがたと音したるが、急にずらりと開く。婦人^{おんな}は上^{あがり}に立^{たち}たるまま、腕^{かいな}を延^のべたる半身、斜^{ななめ}に狭^くき沓^{くつぬぎ}脱^{すりぬ}の上に蔽^{おお}われかかれる。その袖の下を搔^{かいくぐ}潜^{ひそ}りて、衝^つと摺^{すり}抜^ぬけつつ、池ある方^{かた}に走^はり行^{ゆく}くをはたはたと追いかけて、後^{うしろ}より抱^{いだ}き留^{とど}め、

「なぜそうですよ。金魚ばかりセツついて、この児^こは。私ともお遊びツてば、厭^{いや}かい。」

と微笑^{ほほえ}みたり。

「うむ。」

「うむ、じゃアありません。そんなことをお言いだと私や金魚を^{うら}怨みますよ。そして貢さんのお見えなならない時に、^{おツツ}押着けて、ひどい目に逢わせてやるよ。」

「厭だ。」

「それじゃ、まあお坐^{すわ}んなさい。そしてまた手鞠歌^{てまりうた}を唄ってお聞かせな。あの後が覚えたいからさ。何というんだっけね。……二両で帯を買うて、三両で^く締めて、二両で帯を買うて、それから、三両で締めて、そうしてどうするの、三両で締めて……」

「今年はじめて花見に出たら、寺の和尚に抱き留められて。」

とわれは節つけて唄い出しぬ。^{いだ}

婦人^{おんな}は耳^{すま}を澄して聞く。

「寺の和尚に抱き留められて、止^よしやれ、放しやれ、帯切らしやるな。」

「おや、お上手だ。」と障子の外より誰やらむ呼ぶ者ありけり。

二

「誰？」と言いかけて走り出で、障子の隙間^{すきま}より戸外^{おもて}を見しが、彼は早や町の彼方^{かなた}に行く、その後姿は、隣なる広岡の家の下婢^{かひ}なりき。

「貢さんが、お上手だもんだから。立って聞いてたの。それはね、唄も節もまるで私たちの知ツてるのと違うんだもの。もつと聞かして下さい、後でまた昨日きのうの続きのお話をして上げますから。」

この婦人おんな、昔話の上手にて、稚きものにもよく分るよう、可哀あわれなる、おかしき物語して聞かす。いつもおもしろき節にて止やめては、明くる日その続きをと思うに、まずわれに鞠歌を唄わしむるなり。

「高い縁から突き落されて、笄落しこうがい、小枕落し……」

と唄い続けつ。頭かしらを垂れて聞き果てたり。

「何だか可哀あわれつぽいのね。鬱ふさいで来るようだけれど、飛んだおもしろいよ。私たちの覚えたのは、内方うちかた袖方そでかた、御手おんてに蝶や花、

どうやどうんど、どうやどうんど、一丁、二丁、三丁、四丁ツてもう陽気なことばかりで、訳が解^{わか}らないけれど、貢さんのはまた格別だねえ。難^{ありがと}有うござんした。それではちようど隙^{ひま}だし、昨

日のあの、阿銀^{おぎんこぎん}小銀のあとを話してあげましょう。」

とて語り出づる、大方の筋は継母^{ままはは}のその継しき児^こに酷^{むご}きなりけり。

「昨日はどこまで話しましたツけね、そうそう、そうするとね、貢さん、妹の小銀と云う子が感心じやありませんか。今の母^{おつかさ}様^んの子で、姉様^{ねえさん}の阿銀とはお肚^{なか}が違っているのだけれど、それはそれは姉おもいの優しい子で、姉様が継母の悪だくみで山へ棄てられるというのを聞いて、どんなにか泣いたろう。何てツて

頼んでも、母様は肯入ききいれないし、父様おとつさんは旅の空。家来や小者はもうみんなが母様におべつかつてゐるんだから、誰一人執成とりなしてくれようと云うものはなし、しかたがないので、そつとね、姉様がむじつ冤の罪を被きせられて——昨夕ゆうべ話したツけ——冤というのは何にも知らない罪を塗りつけられたの。納屋の中に縛られている処へ忍んで逢いに行つてね、言うようには、姉さん、私がどんなにか母様に頼んだけれど、どうしても堪忍しませんから、一旦いったん連れられておいでなさいまし。後でまたどうにでもしてお助け申しましよう。そうして、いらッしやる処が解らないでは、お迎むかひに行ゆくことが出来ませんから、これを……ッて、そう云つて、胡麻ごまをひとつかみ一ひと掴つか、姉様の袂たもとへ入れてあげたの。行く道々、中の絶えない

ように、そこいらに撒まいておいでなさい。それをたよりにして逢いに行くゆツて、まあ、賢こいじやアありませんか、小銀はようよう九つ。

その晩は手を取りあツて、二人が泣いて別れて、明あくるひ日になる
と、母様の眼を忍んで小銀が裏庭へ出て見ると、枝折戸しおりどの処から、
点々ぽつちりずつ、あの昨夜ゆうべの胡麻ごまが溢れ出して、細い、暗い、背戸山
の坂道へかかつているのを、拾い拾い、ずつとずつと、遠い遠い、
路を歩いて、淋しい山の中へ入ッて行ツたの。そうするとね、新
らしく土を掘りかえした処があツて、搔かきよ寄せたあとが小高くなツ
てて、その上へ大きな石が乗ッけてあつて、そこまで小銀が辿たどつ
て行くと、一ひとすじ条細うく絶たえだえ々に続いていた胡麻のあとが無くな

つていたでしょう。

もう疑うことはない。姉様はこの中に埋いれられたな、と思いがら、姉さん、姉さん、と地つちに口をつけて呼んでみても返事がないから、はッと思つて、泣伏して、耳をこう。」

言いかけて婦人おんなは頭こうべを傾け、顔を斜ななめに眼ねむを瞑りて手をその耳にあてたるが、「ね。」とばかり笑顔寂しく、うつとり眼を開きてわが顔かえでをば見し。戸外おもてには風の音、さらさらと、我家わがいえなるかの楓ならの葉を鳴して、町のはずれに吹き通る、四角よつかどあたり夕戸出ゆうとでの油売はるかる声遥なり。

ひと
一しきり窓あかるく、白き埃^{ほこり}見えたるが、早ものに紛れてくらくなりぬ。寂しくなりたれば、近寄りて婦人^{おんな}の膝に片手突きぬ。彼方^{かなた}も寒くなりけむ、肌を入れつ。片袖を掛けてわが背^{せな}を抱^{いだ}きて蔽^{おほ}いながら、顔さし覗^{のぞ}く状^{さま}して、なお肅^{しめや}かにぞ語れる。

「そうすると、深い深い、下の方で、幽^{かすか}に、姉の阿銀がね、貢さん、（ああい。）てつて返事をしましたとき。

それからまた精一杯な声で、姉さん姉さんツて呼んだの。そうすると、ああ、もう水が出て、足の裏が冷たくツて冷たくツて、と姉さんがお言いだとね。土を掘ったのだもの、水が出ますわ。どうぞして、上の石を退^のけて出してあげようとおしただけれど、

大きな男が幾人もかかつて据えたものを、どうして小銀の手に合うものかね。そちこちするうち日が暮れそうだから、泣き泣きその日は帰ってしまつて、翌^{あくるひ}日また尋ねて行つて、小銀が（小銀が来ましたよ、小銀が来ましたよ。姉さん、姉さん、どこまで水がつきました。）ツて、問うたればね、膝まで水がつきましたツて、そうお言いだとき。そのあくる日は、もう股^{もも}の処へついたツて。またその翌^{あくるひ}日行つた時は、お腹^{なか}の上まで来たんですとね。そうしてもうそうなると、水足が早くなつて、小銀が、姉さん、姉さんツて聞く内に、乳の下まで着いたんだよ。山の中は寂^{ひっそ}りして、鳥の声も聞えない。人ツ子一人通ろうではなし、助けてもらうわけにはゆかず、といつて石は退けられないし、ただもうせめ

てのことに、お見舞をいうばかり、小銀が悲しい声を絞って。」

この時婦人おんなは一息つきたり。可哀あわれなるこの物語は、土地の人口こ

碑うひに伝えて、孫子まごに語り聞かす、一種のお伽ときばなし譚たんなりけるが、

ここをば語るには、誰もかくすなりとぞ。婦人おんなもいま悲しげなる

小銀の声を真似まねむとて、声こわづくろ繕つくろいをしたりしなり。

「（姉さんや、姉さんや、どこまで水がつきました。どこまで水がつきました。もう一度顔が見たいねえ！ 小銀が来ましたよう

。）ツて、呼んでも呼んでも返事がないの。もう下で口が利けな

くなつたんでしよう。小銀の悲しさは、まあどんなだつたろうね

え。叶かなわないとは思つても、ひよツと聞えようかと、（姉さんや、

姉さんや、どこまで水がつきました。）阿銀さん、姉さんツて、

はツと泣き倒れて、姉さん、姉さん。」

と悲しき声す。先刻さきより我知らず悲しくなりしを押耐おしこらえてい

たりしが、もはや忍ばずなりて、わツと泣きぬ。驚きて口をつぐ
みし婦人おんなは、ひとと呆れあきし状さまにて、手も着けでぞ瞻みまもりける。

門かどの戸引開けて、衝つと入りざま、沓脱くつぬぎに立ちて我が名あを慌あわた

く呼びたるは、隣家となりなる広岡の琴弾くかの美しき君なり。

「あれ。」とばかりに後にすさりて、後うしろざまにまたその手を格子

戸の引手ひでにかけし、遁にげも出ださむ身のふりして、面おもてをば赧あからめた

まえる、可懷なつかしと思う人なれば、涙ながら見て、われは莞爾にっこと笑

いぬ。

「まあ私はどうしたというのでしょうか。」

かく言いかけて俯向うつむきたまえり。

「どうぞ、さあどうぞお入りなさいまし。お嬢様まことに散らかしておりますが。」

此方こなたも周章あわてていう。

「はい、まだしみじみ御挨拶ごあいさつにも上りませぬのに、失礼な、ついで、あの、まあ、どうしたら可ようございましょう。」

詮方せんかたなげに微笑ほほえみたまいつ。果はては笑いとこそなりたれ、わが

その時の泣声なみこの殺されやすると思うまで烈はげしき悲鳴なりしかば、折しも戸に倚よりて夕暮の空を見たまいしが、われにもあらで走入りたましいなりとぞ。されば、わが泣きたるも、一つはこの姉上の母の、継母ぞということをば、かねて人に聞きて知れればなり

き。

四

うつくしき君の住いたるは、わが町家の軒ならびに、比びなき
 建物にて、白壁いかめしき土蔵も有りたり。内証は太く富めり
 しなりとぞ。人数は少なくて、姉上と、その父と、母と、下婢
 とのみ、もの静なる仕舞家なりき。

財産持てりというには似で、継母なる人の扮装の粗末さよ。前
 垂も下婢と同じくしたり。髪は鵲の尾のごときものの匆ね出で
 たる都鬘というに結びて、齒を染めしが、ものいう時、上

下の齒ぐき白く見ゆる。

年紀は四十に余れり。われをば睨みしことあらざれど、遊びに行けば余り嬉しき顔せず。かつて夜に入りて、姉上と部屋にて人形並べて遊びしに、油こそ惜しけれ、しかることは日中にするものぞと叫びぬ。

われを憎むとは覚えず、内に行くことをこそ好まざれ、外にて遊ぶ時は、折々ものくれたり。されどかの継母の与えしものに、わが好ましきはあらざりき。

節句の粽貰いしが、五把の中に篠ばかりなるが二ツありき。杏、青梅、李など、幼き時は欲しきものよ。広岡の庭には実のなる樹ども夥多ありし、中にも何とかいう一種李の実の、またなく甘か

りしを今も忘れず。継母の目のなきひまに、姉上の潜ひそに取とりて、
両手うづたかに堆うづたかく盛りてわが袂たもとに入れたまいしが、袖ふりの振あきたれば、
喜び勇みて走り帰る道すがら大方は振り落して、食べむと思うに
二ツ三ツよりぞ多からざりける。

継母はわずかに柿の実二ツくれたり。その一顆ひとつは渋しぶかりき。他
の一顆あじわを味わむとせしに、真紅の色の黒ずみたる、台うてななきは、虫
のつけるなり。熟せしものにはあらず、毒なればとて、亡き母棄
てさせたまいぬ。

いっなりけむ、母上の給たまいたる梨なしの、核しんばかりになりしを地に
棄てしを見て、彼處かしこの継母眉ひそを顰ひそめ、その重宝なるもの投ぐるこ
とかは、磨すりおろして汁をこそ飲むべけれど、老実まめだちてわれに

言えりしことあり。

さる継母に養わるる姉上の身の思わるるに、いい知らず悲しくなりて、かくはわれ小銀の譚ものがたりに泣きしなる。その理由いわれを語るべき我が舌は余り稚おさなかりき。

「まあ、こうなんですよ。お嬢様、ちよいと御覧なさいまし、子供ですねえ。」

女房は笑みつつ言う。そのままにも出でかねてや、姉上は内に入いりたまひ、

「まことに失礼いたしました。私もそそっかしい、考えたつて解りますのにねえ。小母さん、悪く思召さないで下さいまし、ほんとにどうしよう私は。」と、ひたすらに詫びたまひぬ。

此方こなたはただ可笑おかしがりて、

「いいえ、しかし何ですわ。うつかりした話はいたされませんね。私も吃驚びっくりしました、だって泣きようが太ひどいのですもの。厭いやな人ねえ。貢さん、私や懲こりこり々したよ。もうもうこんなことは聞かせません。」と半ばは怨うらみがお顔がなるぞ詮方なき。

「でも賢いのね。貢さん、よくお解りだった。」

と優しく頭撫かしなでつつ、姉上の愛めでたまうに、やや面おもてを起せり。

「お嬢様。」とものありげに戸外おもてより下婢の声懸けたれば、かの君はいそがわしく辞し去りたまいぬ。あと追うて出でむとせしを、女房の遮りて、笑いながら、

「あらそのまんまで遁にげちやずるいよ。もうひとつ手鞠唄をお聞

かせでなくツちやあ……」

再び唄いたり。いな辞みて唄わざらむには、うつくしき金魚もあわれまた継母の手にかか掛りやせむ。

仙冠者

一

我が居たる町は、一筋細長く東より西につまさきあが爪先上りの小路なり。
両側に見みよ好よげなる仕舞家しもたやのみぞ並びける。
市中いちなかの中央の極めて

好き土地なりしかど、この町は一端のみ大通りに連りて、一方の

口は行留りとなりたれば、往来少なりき。

あした ゆうべ

朝より夕に至るまで、腕車、地車など一輛も過ぎるはあらず。

おもいもの

美しき妾、富みたる寡婦、おとなしき女の童など、夢おだやかに

日を送りぬ。

日は春日山の巔よりのぼりて粟ヶ崎の沖に入る。海は西の方に

みちのり

路程一里半隔りたり。山は近く、二階なる東の窓に、かの木戸

の際なる青楓の繁りたるに蔽われて、峰の松のみ見えたり。欄に

寄りて伸上れば半腹なる尼の庵も見ゆ。卯辰山、霞が峰、日

暮の丘、一帯波のごとく連りたり。空蒼く晴れて地の上に雨の

なごり

余波ある時は、路なる砂利うつくしく、いろいろの礫あまた洗い

出^{いだ}さるるが中に、金^{こん}色^{じき}なる、また銀^{ぎん}色^{しよく}なる、緑^{ろく}なる、樺^{かばい}色^{いろ}なる、鳶^{とび}色^{いろ}なる、細^き螺^{しやこ}おびただし。轍^{わだち}の跡^{あと}というもの無ければ、馬も通らず、おさなきものは懸念なく踞^{ついで}居^いてこれを拾^{ひろ}ひたり。

あそびなかまの暮^{くれ}ごとに集^あいしは、筋^{すぢ}むかいなる県^{おとつる}社^ぎ乙^{おと} 剣^{けん}
の宮^{みや}の境内^{きん}なる御^み影^{かげ}石^{いし}の鳥^{とり}居^いのなかなり。いと広^{ひろ}くて地^{つち}をば綺^き
麗^{れい}に掃^はいたり。榊^{さかき}五^ご六^{ろく}本^{ぽん}、秋^{あき}は木^{もく}犀^{せい}の薰^{かおり}みてり。百^{さる}日^{すべり}紅^{こう}あり、
花^は桐^{きり}あり、また常^{とき}磐^{いわ}木^ぎあり。梅^{うめ}、桜^{さくら}、花^{はな}咲^さくはここならで、御^み
手^た洗^{らし}と後^{うしろ} 合^あせなるかの君^{きみ}の庭^{にわ}なりき。

この境内^{きん}とその庭^{にわ}とを、広^{ひろ}岡^{おか}の継^{ひとえ}母^{はは}は一^{ひと}重^えの木^{もく}槿^{ぎん}垣^{がき}をもて隔^へ
てたり。朝^{あさ}霧^{きり}淡^{たん}くひとつひとつに露^{つゆ}もちて、薄^{うす}紫^{むらさき}に薬^し青^{せい}く、純^{まっし}

白しろの、藥赤く、あわれに咲重なる木槿の花をば、繼母は粥かゆに交まじぜて食するなり。こは長なが寿いきする藥ぞとよ。

梨しんの核しんを絞つゆりし汁つゆも、木槿の花を煮こみし粥かゆも、汝なが口ならば旨うまかるべし。姉上にはいかならむ。その姉上と、大方はわれここに来て、この垣かきをへだてて見えぬ。表まみより行ゆかむは、繼母のよき顔せざればなり。

時は日ごとに定まらねど、垣根かきにイめたたずば姉上の直ちに見えたまう。垂籠たれこめていたまうその居間とは、樹々の梢こずえありて遮れど、それと心着きてや必ず庭に來たまうは、虫の知らするなるべし。一あるときは先立ちて園生そのうをそぞろあるきしたまうことあり。さる折には、われ家を出づる時、心の急がざることあらざりき。

行きて差^さ覗^{しのぞ}けば、悄^{しお}れて樹^この間に立ちて、首^{こうべ}をさげ、肩^{かた}を垂^たれ、襟^{えり}深く頤^{おとが}を埋^{うづ}めて力^{ちから}なげにイみたまう。病^{やまひ}氣^きにやと胸^{むね}ま^{とどろ}ず轟^{とどろ}くに、やがて目^めをあ^{こなた}げて此^{こなた}方^たを見^みたまう時^{とき}、莞^{えん}爾^{にっこ}として微^{ほほえ}笑^えみたまえば、病^{やまひ}にはあ^{やまい}らじと見^みゆ。か^かかることしばしばあり。

ひとり
独居^{ひとり}たまう時^{とき}はいつも^{ひと}しかなりけむ。われには笑^{わら}顔^{がほ}見^みせたまわ^{まわ}ざること絶^{こと}えてなかりしが、わがために慰^{なぐさ}めらるるや、さらば勉^{つとめ}て慰^{なぐさ}めむとて行^いく。もどかしき垣^{かき}を中^{なかつ}なる逢^{おう}瀬^せのそれさえも随^ま意^いならで、ともすれば意^い地^ぢ悪^{あく}き人^{ひと}の妨^{さまた}ぐる。

く^くにまろ
国^{くに}磨^{まろ}という、旧^{もと}の我^{われ}が藩^{はん}の有^あ司^しの児^この、われより三^{さん}ツばかり年^{とし}紀^きたけたるが、鳥^{とり}居^ぎの突^{つき}あたりなる黒^{くろ}の冠^{かぶ}木^き門^{もん}のいと嚴^いしき^{かめ}なかにぞ住^すいける。

二

肩幅広く、胸張りて、頬に肥肉つき、顔丸く、色の黒き少年なりき。腕力もあり、年紀も長けたり、門閥も貴ければ、近隣の少年等みな国麿に従いぬ。

厚紙もて烏帽子を作りて被り、払を腰に挿したるもの、顱巻をしたるもの、十手を携えたるもの、物干棹を荷えるものなど、五三人左右に引着けて、渠は常に宮の階の正面に身構えつ、稲葉太郎荒象園の鬼門なりと名告りたり。さて常にわが広岡の姉上に逢わむとて行くを、などさは女々しき振舞する。ともに遊ぶ、

なかまにならば、仙冠者牛若三郎という美少年の豪傑になさむと言いき。仙冠者は稲葉なにがしの弟にて、魔術をよくし、空中をひぎよう飛行せしとや。仙冠者をわれ嫌うにあらねど、誰か甘んじて国磨の弟たらむ。

言うこと肯かざるをいた太く憎み、きびしくその手下に命じて、われと遊ぶことなからしめたり。さらぬも近隣の少年は、わが袖長き衣きぬを着て、好きよ帯したるを疎うとんじて、宵々には組を造りて町中を横行しつつ、我が門かどに集いては、軒に懸けたる提灯ちようちんに礫つぶてを投じて口々に罵りぬ。ののし母上の名、仮名もてその神燈に記されたり。亡き人に礫打たしては、仏を辱かしめむとて、当時わが家をば預りたまえる、伯母の君他ほかのに取りかえたまいぬ。

かかりし少年の腕力あり門閥ある頭領を得たるなれば、何とて
 我威を振ふるわざるべき。姉上に逢わむとて木むくげ槿垣がきに行く途みち、まず
 一人物干棹をもて一文字に遮り留とどむ。十手持ちたるが引添まなこいて眼
 を配り、顱こぶ巻したるが肩をあげて睨ねめ着くる。その中にやさしき
 顔のかの烏帽子被かぶれる児この払はたきをば、国麿の引取りて、背後うしろの方に
 居て、片手を尻下りに結びたる帯にはさみて、鷹揚おうように指揮さしずする
 なり。

わびたりとて肯くべきにあらず、しおしおと引返す本意ほんいなき日ひ
 数かずこそ積りたれ。忘れぬは我わがために、この時嬉うれしかりし楓にこそ。
 その枝のさき近々と窓の前にさしいでたれば、広岡のかの君は
 二階にのぼりて、此方こなたの欄てすりに掴つかまりたるわが顔を見て微笑ほほえみたま

いつつ、腕かいなさしのべて、葉さきをつまみ、撓しないたる枝を引寄せて、折鶴、木※、雛みみずひいなの形に切りたるなど、色ある紙あまた引結いてはソト放したまう。小枝は葉摺はずれしてさらさらと此方に撓いて来つ。風少しある時殊に美しきは、金紙きんし、銀紙ぎんしを細く刻こまかみて、蝶の形にしたるなりき。

雨の日はいかにしけむ、今われ覚えておらず。麗うらわらかなる空をばひとむれはと一群の鳩輪をつくりて舞うが、姉上とわれと対むかいあえるに馴なれて、恐おそれ気なく、此方こなたの軒、彼方かなたの屋根に颯さつと下しては翼を休めて、ひさし廂にも居たり。物干場の棹にも居たり。棟にも居たり。みな表おもて町なる大おおど通おりの富有の家に飼われしなりき。夕ゆうぐ越こえくれば一斉に塹ねぐらに帰る。やや人足繁く、戸外おもてを往来ゆきかうが皆あおぎて見

つ。楓にはいろいろのもの結ばれたり。

そのまま置きて一夜を過すに、あくる日はまた姉上の新たに結びたまわでは、昨日なるは大方失せて見えなくなりぬ。

手届きて人の奪うべくもあらねば、町の外れなる酒屋の庫と観世物小屋の間に住めりと人々の言いあえる、恐しき野衾の来て攫えて行くと、われはおさなき心に思いき。

野衾

その翼広げたる大きさは鳶とびに較たぐうべし。野衾のぶすまと云うは蝙蝠こうもり
の百歳ももとせを経たるなり。年紀六十に余れる隣の扇おうぎ折おりの翁おじが少わか
き時は、夜ごとにその姿見たりし由、近き年は一年ひととせに三たび、
三月に一度たびなど、たまたまならでは人の眼に触れずという。一尾
ならず、二ツ三ツばかりある。普通なみの小さきものとは違いて、夏
の宵、夕月夜、灯ひともす時、黄昏たそがれには出来いできたらず。初夜すぎてのち
ともすればその翼もて人の面を蔽おもてうことあり。柔かに冷き風呂敷
のごときもの口に蓋ふたするよと見れば、胸の血を吸わるとか。幻
のごとく軒ひらめに閃ひらめきて、宮なる鳥居を掠かすめ、そのまま隠れ去る。か
の酒屋の庫くらと、観世物小屋の間まで、わが家より半町ばかり隔り

し。^{まんなか}真中に古井戸一ツありて、雑草の生い茂りたる旧空地^{もと}なり

しに、その小屋出来たるは、もの心覚えし後なり。

興行あるごとに打^{うち}囃^{はや}す鳴^{なり}物^{もの}の音^{おと}頼^{たの}母^もしく、野衾の恐れも薄

らぐに、行^ゆきて見れば、木戸の賑^{にぎ}いさ^わあるを、内はいかにおも

しろからむ。母上いませし折は、わが見たしと云うを許したまわ

ず、野衾の居て恐しき処^{ところ}なるに、いかでこの可愛^{かわ}きもの^ゆ近寄らし

むべきとて留^{とど}めたまいぬ。

亡き人となりたまいて後は、わが寂しがるを慰めむとや、伯母
上は快よく日ごとに出だしたまう。場内の光景は見馴^なれて明^{あき}に覚^ら
えたり。

土間、引船、棧^{さじき}敷などいふべきを、鶉^{うずら}、出^{でう}鶉^{ずら}、坪、追込など

称^{とな}えたり。舞台も、花道も芝居のごとくに出来たり。人数一千は入^いるるを得たらむ。

木戸には桜の造^{つく}りばな^り花^{はな}を廂^{ひさし}にさして、枝々に、赤きと、白きと、数^{かず}あまた小提灯^{こちようちん}に、「て。」「り。」「は。」と一つひとつ染め抜きたるを、夥^{おびただ}しく釣^{つる}して懸け、夕暮には皆灯^{ひとも}すなりけり。その下あたり、札をかかげて、一人々々役者の名を筆太にこそ記したれ。小親^{こちか}というあり、重子というあり、小松というあり、秋子というあり、細字^{さいじ}もてしのぶというあり。小光、小稲^{こいな}と書きつらねて、別に傍^{かたわら}に小六と書いたり。

しるしばんてんき
 印半纏被たる壮佼わかもの、軒はしごに梯子はしごさして昇りながら、一つ
 ずつ提灯ひに灯ひともすが、右かたの方より始めたれば、小親という名、
 ぱつと墨色濃く、鮮あざやかに最初の火に照てらされつ。蠟燭ろうそくの煮え込ま
 ざれば、その他はみな朧おぼろげ氣なりき。

ありたけの提灯あかくなりたる後に、一昨日おとといも、その前さきの日も、
 昨日きのうも来つ。この夕ゆうべは時やや早かりければ、しばしわれ木戸の前
 に歩ある行くともなくたたずゝみつ、幾度いくたびか小親の名を仰ぎ見たり。名
 を見るさえ他のものとは違ちがいて、そぞろに興ある感起りぬ。かね
 てその牛若ぶんに扮ふんせし姿、太いたくわが心にかないたり。

見物は未いまだ来きたり集わす。木戸番の燈大ともしび通おどおりより吹きつくる風

に揺れて、肌寒う覚ゆる折しも、三台ばかり俵をくるまならべて、東より颯と乗着けしが、一斉に轆ながえをおろしつ、と見る時、女一人おり立ちたり。続いて一人片足にんを下せるを、後なる俵より出でたる女、つと来て肩を貸すに手を掛けてひらりと下りたり。先なるは紫の包を持ちて手に捧げつ。左右に二人引添にんいたる、真中まんなかに丈たかきは、あれ誰やらむ、と見やりしわれを、左なる女木戸をい入りざま、偶と目を注ぎて、

「おや、お師匠様。」

また一人、

「あの、このお子ですよ。」と低声こゝろこえに言いたり。聞棄てながら一歩を移せし舞の師匠は振返りつ。冴さやかなる眼にキトわれを見しが、

互に肩を擦合せて小走りに入るよとせしに、つかつかと引返して、冷たき衣きぬの袖もてわが頸うなじを抱くや否や、アと叫ぶ頬をしたたかに吸いぬ。

ややありてわれ眼を睜みはりたり。三人は早や木戸を入りて見えざりき。あまり不意なれば、茫然ぼうぜんとして立つたるに、ふと思い出でしは野衾の事なりき。俄にわかに恐しくなりて踵くびすを返す。通の角とおりに、われを見て笑いながらイミたるは、その頃わが家に抱えられたる染そめという女なり。

走り行きて胸ゆに縫すがりぬ。

「恐こわかったよ、染ちゃん恐かったよ。」

「そう、恐かったの、貢さんはあれが恐いのかい。」

「見ていたの。」

「ああ見ていたとも、私が禁^{おまじない}厭^いをしてあげたから何とも無かつたんですわ。危ないことね。」

「恐かつたよ。染ちゃん、顔をね、包んでしまったから呼吸^{いき}が出なかつたの。そうして酷^{ひど}いの、あの頬^ほぺたを吸^ひつたんだ。チュツてそう云つたよ、痛いよ、染ちゃん。」

染は眉^{ひそ}を顰^{ひそ}めて仔細^{しさい}らしく、

「どれ、ちよいとお見せ。」

と言いつつ、「て」「り」「は」の提灯のあかりに向けて透^{すか}し見るより、

「おや、おや、おや、大變。まあ。」とけたたましく言うに、わ

が胸轟とどろきたり。おどおどすれば真顔になりて、

「乱暴だ、酷いことをするわ、野衾が吸ったんだね、貢さん、血が出てるわ。……おや。」

驚きて、

「あら、泣くんじやアありません。何ともないよ、直ぐ治るから往来で何のこツたね、あら、泣かないでさ。」

と小腰を屈かがめて、湯に行ゆきし帰途かえりなれば、手拭てぬぐいの濡れたるにて、その血の痕あとというもの拭ぬぐいたり。

「さあ、治りました。もう何ともないよ。」

と賺すかす、血の出たるが、こう早く癒いゆべしとは、われ信ぜず。

「嫌だ、嫌だ、痛いや、治りやしないや。」

「困るね。」

いう折しもまたここに来かかりしは、むかいなるかの女房なりき。われはまた彼方^{かなた}に縋りぬ。

「小母さん、恐かったよ。あのね、野衾が血を吸ったの。恐かったよ。」

「え、どうしたって云うの、大変だ、あの野衾がね。」
傍^{かたわら}より、

「姉さんほんとうですよ、あのね。」

と言いつつ、ひたと身を寄せ、染は耳^{みみたぶ}朶^{ささや}に囁きて、

「ね、ほんとうでしょう……ですからさ。」とまた笑えり。

女房は微笑^{ほほえ}みながら、

「不可^{いけな}いよ。貢さんは何でもほんとにするから欺^{だま}されるんだよ。この賑^{にぎや}かなのに、何だつてまた野衾なんかが出るものかね。嘘だよ、綺麗な野衾だから結構さ。」

「あら姉さん。」

「お止^よしよ。そんなこと謂^いつて威^{おど}すのは虫の毒さ、私も懲^{おど}りたこととが有るんだからね、欺^いしツこなし。貢さん、なに血なもんかね、御覧よ。」

中指のさきを口に含みて、やがて見せたる、血の色つきたり。

「紅^{べに}さ。野衾でも何でも可^いいやね。貢さんを可愛^いがるんだもの、

恐^{おそ}くはないから行つて御覧、折角、氣^き晴^{ばらし}に行く^ゆのものを、ねえ。

此奴^{こいつ}が、」

「あれ。」

「あばよ。」とばかり別れたる、囃子はやしの音おもしろきに、恐しき念も失せて、忙せわしくまた木戸に行きぬ。

能は始まりたり。早くと思うに、木戸番の男、鼻低う唇厚きがわが顔を見てニタニタと笑いいたれば、何をか思うと、その心はかり兼ねて猶ためら予いぬ。

三

「坊ちゃん、お入んなさい、始りましたよ。」
わが猶ためら予いたるを見て、木戸番は声を懸けぬ。日ごとにゆ行きた

れば顔を見識れるなりき。

「どうなすつたんだ。さあ、お入んなさい、え、どうしたんだね。もう始りましたぜ。何でさ、木戸銭なんか要りやしません。お入んなさい、無銭で可うごす。木戸銭は要りませんから、菓子でも買つておあがんない。」

大胡坐搔きたるが笑いながら言示せり。さらぬだに、われを流晒しりめにかけたるが氣に懸かりて、そのまま歸らむかと思えるならば、堪こたえず腹立たしきに、伯母上がたましい銀貨入いりたる緑色の巾着、手に持ちたるままハタと擲なげちたり。銀貨入を誰たが惜おしむ。投なぐると齊ひとしく駈かけ出いだしぬ。疾とく歸りて胸なる不平を伯母上に語らばやと、見も返らざりし背後うしろより、蹺あし音忙おとせわしく追迫りて、手を

捉とらえて引留めしは年若き先の女むすめなり。

「坊ちゃん、まあ、あなた、まあどう遊ばしたんですよ。どこへいらつしやるのさ。え、何かお気に入らない事があつたんですか。お怒りなすつて、まあ、飛んだ御機嫌が悪いのねえ。堪忍して頂戴な。よう、いらつしやいよ。さあ、私と一所においでなさいましなね。何です、そんな顔をなさるもんじやありません。」

「嫌だ。」

「あれ、そんなこと有おっしや仰らないでさ。あのね、あのね、小親さんがお獅子を舞いますツて、ね、可いいでしょう、さあ、いらつしやい。」

と手を取るに、さりと拒み得で伴われし。木戸に懸かる時、木

戸番の爺おじわれを見つつ、北叟ほくそえ笑むようなれば、面おもてを背けて走り入りぬ。

人大方は来揃さじきいたり。棧敷の二ツ三ツ、土間少し空きたる、舞台に近き棧敷の一間に、女はわれを導きぬ。

「坊ちゃん、じゃあね、ここで御覧なさいまし。」

意外なる待遇もてなしかな、かかりし事われは有らず。平時いつもはただ人の前、背後うしろ、傍わきなどにて、妨さまたげとならざる限り、処定めず観たりしなるを。大なる棧敷の真中まんなかに四辺あたりをみまわして、小き体一個ひとつまず突つ立てり。

とばかりありて、仮花道に乱れ敷き、支え懸けたる、見物の男な女にが袖そで肱ひじの込合うたる中をば、飛び、飛び、小走こばしりに女めの童わらわ

一人、しのぶと言うなり。緋^ひ鹿^が子^{のこ}を合せて両面着けて、黒^{くろ}き天^{てん}鷲^{じゆ}
絨^{うどへり}の縁取りたる綿厚^{さぶとん}き座蒲団の、胸に当てて膝を蔽^{おほ}うまでなるを、
両袖に抱えて来つ。

見返^{むすめ}る女に顔を見合せて、

「あのね、姉^{むすめ}さんが。」と小声に含めて渡す。

受取^{むすめ}りて女は棧敷に直しぬ。

「さあ、お敷き遊ばせよ。」

われはまた蒲団に乗りて、坐^{すわ}りもやらで立ったりき。女^{むすめ}は手も
て足を押えて顔を見て打笑みたり。

「さあ、おゆつくり。」

われは据えられぬ。

「しのぶさん、お火鉢。」

「あい。」と云いしが、して、土間より立つたる半纏着の壮^{わかも}伎^{もの}を^{さしまね}磨^をき、

「ちよいと、火鉢をね。」

「おい。」とこちら向く。その土間なる客の中に、国磨^{まじ}の交^{まじ}りしをわれ見たり。顔を見合せ、そ知らぬ顔して、仙冠者は舞台^{かた}の方に^{まなこ}眼^をを^{まなこ}転^をじぬ。牛若に扮したるは小親にこそ。

四

髪^{つやや}のいと黒くて艶^{つやや}かなるを、元^{もつとい}結^{とい}かけて背に長く結びて懸け

つ。大口の腰に垂れて、舞う時靡なびいて見ゆる、また無き風情なり。
 狩かりぎぬ衣の袖もゆらめいたり。長範をば討つて棄て、血ちがたな刀提げて
 吻ほと呼吸いきつく状さまする、額には振分たる後おくれば毛の先端さき少し懸かかれり。
 眉りり凜々しく眼の鮮あざやかなる、水の流るるごときを、まじろぎもせで、
 正面に向いたる、天あつぱれ晴快き見得なるかな。

囃子の音止やひつそみ寂然となりぬ。肅然として身を返して、三の松を
 過ぎると見えし、くるりと捲まいたる揚幕に吸まわるるごとく舞込み
 たり、

「お茶はよろし、お菓子はよしかな、お茶はよろし。」

と幕間まくあいを売歩うりある行く、売子の数の多き中に、物語の銀六とて痴たわ
 けたる親仁おやじ交りたり。茶の運びもし、火鉢も持て来、下足の手伝

もする事あり。おりおり、小幾、しのぶ、小稲が演ずる、狂言の中に立交りて、ともすれば屹きつとなりて居直りて足を構え、手拍子打ち、扇を揚げて、演劇しげいの物語の真似まねするがいと巧たくみなれば、皆おかしがりて、さは渾名あだなして囃はせるなり。

真似の上手なるも道理ことわりよ、銀六は旧俳優もとやくしゃなりき。

かつて大槻内蔵之助おおつきくらの演劇しげいありし時、渠かれ浅尾を勤めつ。三年みつとせあまり前さきなりけむ、その頃母上居たまいたれば、われ伴われて見ゆに行ゆきぬ。

蛇責へびぜめこそ恐しかりけり。大釜おおがま一個まず舞台に据えたり。背う

後しろに六角の太き柱立てて、釜に入れたる浅尾のんどの咽喉を鎖いましもて縛しめて、真白きぬなる衣着きぬせたり。顔の色は蒼あおざめて、乱みだれ髪がみ振りかか

れるなかに輝きたる眼の光の凄まじさ、みなこ瞻り得べきにあらず。夥く
 兵立懸り、押取巻く、上手に床几を据えて侍控えいて、何
 やらむいい罵りしが、薪をば投入れぬ。

どろどろと鳴物聞えて、四辺暗くなりし、青白きものあり、

一条左の方より閃きのぼりて、浅尾の頬を掠めて頭上に鎌首を

擡げたるは蛇なり。啊呀と見る時、別なるがまた頸を絡いて左な

るとからみ合いぬ。恐しき声をあげて浅尾の呻きしが、輪になり、

棹になりて、同じほどの蛇幾条ともなく釜の中より蜿蜒り出でつ。

細く白き手をきて、その一条を搔掴み、アと云いさま投げ棄

てつ。交る交る取つて投げしが、はずみて、矢のごとくそれたる

一条、土間に居たまいたる母上の、袖もてわれを抱きてうつ向き

たましい目の前さきにハタと落ちたるに、フト立ちて歸りたまいき。

この時その役勤つとめし後、渠かれはまた再び場じように上らざるよし。蛇責へびくちの

釜かまに入りしより心地悪あしくなりて、はじめはただ引籠ひきこもりしが、俳やくしやいや

優厭ゆうえんになりぬとて罷やめたるなり。やや物狂わしくなりしよしなど、伯母上のうわさしたまう。

何いずちゆ地行きけむ。久しくその名聞えざりしが、この一座に交りて、

再び市いちびと人の眼に留りつ。かの時の倅おもかげは、露ばかりも残りおらで、

色も蒼からず、天窓あたまは兀ぼげたり。大声に笑い調子高にもおいしい、身

軽く小屋の中を馳はせ廻りて独快ひとりげなる、わが眼にもこのおじが、

かの恐しき事したりとは見えず。赤き顱はちまき巻向うざまにしめて、

裾すそを括からげ、片肌脱ぎて、手にせる菓子はちまきの箱高く捧げたるがその銀

六よ。

五

「人気だい、人気だい。や、すてきな人気じゃ。お菓子、おこし、小六さん、小親さん、小六さんの人気おこし、おこしはよしかな。」

お菓子はよしかな。」

いまの能の品しなさだめ評 やする、ごうごうと鳴る客の中を、勢いよ

く売ありきて、やがてわが居たるさじき棧敷きたに來りて、

「はい、これを。」

と大きく言いて、紙包にしたる菓子をわが手に渡しつ。

「樂屋から差上げます。や、も、皆大喜び、数ならぬ私^{わたくし}まで、ははは。何てツてこれ坊ちゃんのようなお小^{ちいさ}いのが毎晩見て下さる。当興^{おおあたり}行大^{おお}当、滅茶々に面白い。すてきに面白い。おもしろ狸のきぬた巻でも、あんころ餅^{もち}でも、鹿子餅^{かのこ}でも、何でもございじゃ、はい、何でもござい、人氣おこし、お菓子^{かし}はよしか。小六さん、小親さん、小六さんの人氣おこし、おこしはよしか。」と呼びかけて前の棧敷^{また}を跨ぎ越ゆる。

ここに居て見物したるは、西洋手品の一^{ひと}群^{むれ}なりし。顔あかく、眼^{まなこ}つぶらにて、頤^{おとがい}を髯^{うげ}に埋^{うず}めたる男、銀六の衣^{きもの}の裾^{すそ}むずと取りて、「何を！」と言いさま、三ツ紋つきたる羽織の片袖まくし揚げつ、

「何だ、小六さん、小六さんの人気おこしたあ何だ。」

「へい。」

「へいじゃあない、小六さんたあ何だ。客の前を何と心得てるんだ。^{けだもの}獣め、乞食芸人の癖に様づけに呼ぶ奴が^{やつ}あるもんか。汝^{きさま}あ何だい、馬鹿め！」

と言うより早く拳^{こぶし}をあげて、その胸のあたりをハタと撲^うちぬ。背後^{うしろ}に蹠^{よろ}躑^{よろ}けて渋面^{しぶめん}せしが、たちまち笑顔になりて、

「許させられい、許させられい。」

と身を返して遁^にげ行^ゆきぬ。

この時、人声静まりて、橋がかりを摺^{すり}足^{あし}して、膏^{こう}葉^{やく}練^{ねり}ぞ出^で来^{きた}れる。その顔は前^{さき}にわれを引留^{ひきど}めて、ここに伴^むいたるか女^{すめ}

に肖^にたるに、ふと背後^{うしろ}を見れば、別なるうつくしき女、いつか来て坐^{おもかげ}りたり。黒髪^{つか}を束ねて肩に懸けたるのみ、それかと見れば、梯^{おもかげ}は舞台なりし牛若の凜々^{りり}しげなるには肖^にで、いと優しきが、涼しき目もて、振向きたるわが顔をば見し。打微笑^{うちほほえ}みしまま未^{いま}だものいわざるにソト頬^{ほお}摺^{すり}す。われは舞台に見向きぬ。

背後^{うしろ}見らるる心地もしつ。

ややありて吸^{すい}競^{くら}べたる膏藥練^{かた}の、西なる方吸^{かた}寄せられて、ぶざまに転^こけかかりたる状^{さま}いと可笑^{おかし}きに、われ思わず笑いぬ。

「おもしろうござんすか。」

と肩に手をかけて潜^{ひそ}めき問いぬ。

「よく来て下さいますね。ちよいと、あの、これを。」

渠は先^{かれ}にわが投げ棄てし銀貨入を手にしつつ、

「私これ頂いときますよ。ね、頂戴。可^ようござんすか。」

「ああ。」

また領^{うなず}けば軽く頂き、帯の間に挟みしが、

「木戸のがね、お氣に入りませんだったら叱ッてもらってあげますから、腹を立てないで毎晩、毎晩、いらつしやいましな、ね。」

ちやんとここを取って、私のこのお蒲団敷いてあげますわ。そうしてお前さんの好きなことをして見せましょう。何が可^いいの、狂言がおもしろいの。」

「いいえ。」

「じゃあ、お能の方なの。」

「牛若が可いんだ、刀持って立派で可いんだ。」
「そう。」と言いかけて莞爾^{にこり}とせしが、見物は皆舞台を向いたり。
人知れずこそ、また一ツ、ここにも野衾居たりしよ。

狂言

一

見物みな立ちたればわれも立ちぬ。小親が与えし緋鹿^{ひが}子の蒲団^{ふとん}
の上に、広き棧敷^{さじき}の中に、小さき体一ツまたこそこの時突立^{つった}ちた

れ。さていかにせむ。前なるも、後なるも、うしろ左も右も、人波打ち
つつどやどやと動揺どよみ出づる、土間棧敷に五三人、ここかしこに
出後でおくれしが、頭巾被かぶるあり、毛布けつとまと纏うあり、下駄つつまの包提ひとげたるあ
り、仕切の板飛び飛びに越えて行く。木戸の方はかた一ひと団かたまりになり
て、数すひやく百の人声推合おしあえり。われはただ茫然としてせむ術すべを知ら
ざりき。

「おい、帰らないか。」

と声を掛け、仕切の板に手を支つきて、われを呼びたるは国麿ほたんな
り。釦三ツばかり見ゆるまで、胸を広く搔かきひろ広げて、袖をも肱ひじま
で捲まくし上げたる、燃立つごとく紅くれないの襯衣しやつ着たり。尻さがりに結べ
る帯、その色この時は紫にて、

「どうした、一所に帰ろうな。」

「後から。」と低く答えぬ。

国麿は不満の色して、

「だって皆^{みんな}帰るじゃあないか。一人ぼっちで何しに残るんだ。」

「だって、まだ、何だもの。」

となお猶^{ためら}予いぬ。女来^{むすめ}て帰れと言わず、座蒲団このままにして、いかで、われ行^ゆかるべき。

国麿はものあり顔に、

「可^いいじゃあないか、一所に帰ったって可^いいじゃあないか。」

「だって何だから……どうしたんだなあ。」

ひたすら楽屋の方打^{かた}見やる。国麿は冷^{ひや}かなる笑^{えみ}を含み、

「用があるんか。誰か待ってるか、おい。」

「誰も待ってやしないんだ。」

「嘘を吐け。いまに誰か来るんだろう。云ったって可いじゃないか。」

「誰も来るんじやあないや。そうだけれど……困るなあ。」

「何を困るんだ。え、どうしたんだ。」

「どうもしないさ。」

「じやあ困る事はないじやあないか。な、一所に帰ろうと云うに。」

顔の色変りたれば恐しくなりぬ。ともかくも成らば成れ、ともに帰らむか。鳥居前のあたりにて、いかなる事せむも計られずと

思いて逡巡するに、国麿は早や肩を揚げぬ。

「疾^{はや}くしないかい、おい。」

「だって何だから。」

「何が何だ、おかしいじゃあないか。」

「この座蒲団が……」

国麿はいま見着けし顔にて、

「や、すばらしい蒲団だなあ。すばらしいものだな、どうしたんだ。この蒲団はどうしたんだ。」

「敷いてくれたの。」

「誰が、と聞くんだ、敷いてくれたのは分ってらい。」

「お能のね、お能の女。」

「ふむ、あんな奴やつの敷いたものに乗つかる奴が有るもんか。彼奴あいつ等、おい、皆乞食みんなだぜ。踊うたつてな、謡うた唄うたつてな、人に銭よウ貰うつてる乞食なんだ。内の父おとっさん様なかなか、能も演やるぜ。む、謡うたも唄うたわあ。そうして上手なんだ。そうしてそういつてるんだ。ほんとのな、お能というのは男がするもんだ。男の能はほんとうの能だけれど、女のは乞食だ。そんなものが敷よこいて寄越よこした蒲団に乗るとな、汚けがれるぜ。身からだが汚けがれらあ。しちりけっぱいだ、退どけ！」
踏みこたえて、

「何をする。」

「何でえ、おりや士族だぜ。退け！」

二

国麿は擬勢を示して、

「汝^{きさま}平民じゃあないか、平民の癖に、何だ。」

「平民だつて可^いいや。」

「ふむ、豪勢なことを言わあ。平民も平民、汝^{きさま}の内や芸^{げい}妓^{しや}屋じやあないか。芸妓も乞食も同^{おんなじ}一^{いっ}だい。だから乞食の蒲団になん

か坐るんだ。」

われは恥かしからざりき。娼家の児^こよと言わるるごとに、不斷は面^{おもて}を背けたれど、こういわれしこの時のみ、われは恥しと思わざりき。見よ、見よ、一たび舞台に立たむか。小親が軽^{かろ}き身^{はた}の働^{たら}き、

躍れば地に棲つちを着つまけず、舞の袖の翻るは、宙そらに羽衣懸かると見ゆ。

なぎなた

長刀かつぎてゆらりと出づれば、手に抗たつ敵の有りとも見えず。

足拍子踏んで大手を拵さつげ、颯さつと退ひいて、衝つと進む、疾ときこと電いなずまの

ごとき時あり、見物は喝かつさい采しき。軽かろきこと鷲毛がもうのごとき時あり、

見物は喝采しき。重きこと山のごとき時あり、見物は襟えりを正しき。

うつくしきこと神のごとき時あり、見物は恍こう惚こつたりき。かくて

も見てなお乞食と罵る、さは乞食の蒲団に坐して、何等やま疚いしきこ

とあらむ。われは傲ごうぜん然として答えたり。

「可いよ乞食、乞食だから乞食の蒲団に坐るんだ。」

「何でえ。」

国麿は眼つぶらを円にしつ。

「何でえ、乞食だな、汝^{きさま}乞食だな、む、乞食がそんな、そんな縮^ちりめん緬の蒲団に坐るもんか。」

「可いよ、可いよ、私^{あたし}、私はね、こんなうつくしい蒲団に坐る乞食なの。国ちゃん、お菰^{こも}敷いてるんじゃないや。うつくしい蒲団に坐る乞食だからね。」

国麿は赤くなりて、

「何よウ言つてんだい。おい貢、汝^{きさま}そんなこと言つて可いのかな、帰途^{かえり}があるぜ。」

威^{おど}されてわれはその顔を見たり。舞台は暗くなりぬ。人大方は立^{たち}出ぬ。寒き風場^{じょう}に満ちて、釣^{つり}洋燈三ツ四ツ薄暗^{あかり}き明映すに心細くこそなりけれ。

「^{かえり}帰途があるって、帰途がどうしたの、国ちゃん。」

国麿は^{あざわら}嘲笑えり。

「知ってるだろう。鳥居前の俺^{おれ}が関を知ってるだろう。」

手下四五人、稲葉太郎荒象園の^{おにかどかしこ}鬼門彼処に有りて威^{ほしいまま}を恣にす。

われは黙して俯^{うつむ}向きぬ。国麿はじりりと寄りて、

「^{みんな}皆知^{さつき}つてるぜ、おい、皆見ていたぜ。^{きさあんな}汝婦人とはかり仲好くし

て、^{はなし}先刻もおれを見て知らない顔して談話してたじやあないか。

そうするが可いや、うむ、たんとそうするさ。」

「国ちゃん、堪忍おし。」

「へ、あやまるかい。うむ、あやまるなら可いや。じゃあ可いから、な、その座蒲団にちよつと^{おれ}己をのツけてくれないか、そこを

退いて。さあ、」

国麿はヌト立ちつつ、褻取り^{つま}からげて、足を、小親がわれに座を設けし緋鹿子に乘せんとす。止む^やなく、少しく身を退^ひきしが、と見れば足袋を穿^はきもせで、そこら跣足^{はだし}にてあるく男の、足の裏太^{いた}く汚れて見ゆ。ここに乗せなばあとつけなむ、土足にこの優しきもの踏ますべきや。

「いけないよ。」

「何だ……」

覚悟したれば身を交^{かわ}して、案のごとく踵^{かかと}をあげたる、彼が足蹴^{あしげ}をば外^{そと}してやりたり。蒲団持ちながら座を立ちたれば、拳^{こぶし}の楯^{たて}に差^{さしかざ}翳^{かげ}して。

三

「あら。」

国麿の手は弛^{ゆる}みぬ。われは摺^{すり}抜^ぬけて傍^{かたえ}に寄りぬ。

「いやです、いやです、あなたはいやです。」

緋鹿子の片隅に手を添えて、小親われを庇^{かば}うて立ちぬ。国麿は

目を怒らしたり。その帯は紫なり、その襯衣^{しやつくれ}は紅^{くれない}なり。緋鹿子の

座蒲団は、われと小親片手ずつ掛けて、右左に立^{たち}護^{まも}りぬ。小親

この時は楽屋着^{すそ}の裾長^{ひぢりめ}く緋縮緬^{ひぢりめ}の下着踏みしだきて、胸高に水

色の扱^{しづき}帯まといたり。髪をばいま引束ねつ。優しき目の裡^{うち}凜^{りん}とし

て、

「もし、旦那様、あの、乞食の蒲団は、いやです、私が貴方^{あなた}にや敷かせないの。私の蒲団です。渡すことはなりません。」

と声いとすずしくいい放てり。

「よく敷かせないで下さいました。お前さん、どこも何ともないかい。酷^{ひど}いよ、乱暴ツちやあない。よくねえ、よく庇^{かば}つて下すツたのね。楽屋^{みんな}で皆^{みな}がせりあつて、ようよう私が、あの私のを上げたんですもの。他人^{ひと}に敷かれて堪^{たま}るものかね、お帰りよ、お帰り遊ばせよ。あなた！」

「何でえ、乞食の癖に、失敬な、失敬じゃあないか。お客^{むか}に向ツて帰れたあ何だい。」

「おからだの汚けがれになります。ねえ。」

とわが顔に頬をあてて、瞳は流れるごとく国麿を流眄しりめに掛く。

国麿は眉を動かし、

「馬鹿、年増としまの癖に、ふむ、赤ン坊に惚ほれやがったい。」

「え、」

と顔を赧あからめしが、

「何ですねえ、存じません。何の、鼯鼠ひいきになすって下さるお客様を大事にしたって、何が、何が、おかしゆうござんすえ。」

「おかしいや、そんな小ッちぽけなお客様があるもんか。」

「あら、私ばかりじゃありません。姉さんだツて、そういいました。そりや御鼯鼠になすツて下さるお客も多いけれど、何の気

なしにただおもしろがつて見て下さるのはこのお児こばかり。あな
た御存じないんでしょう。当座こちらではじめてから毎晩、毎晩来て下
すつて、あの可愛らしい顔をして傍見わきみもしないで見ていて下さる
じやありませんか。このお年紀としで、お一人で、行儀よく終番しまいまで
御覧なすつて、欠伸あくび一ツ遊ばさない。

手品じやアありません、独樂廻こましじや有りません。球乗たまのりでも、

猿芝居でも、山雀やまがらの芸でもないの。狂言なの、お能なの、謡を

うたうの、母おつかさん様に連れられて、お乳をあがつていらつしやる

方よりほか、こんな罪のない小児衆こどもしゅうのお客様がもう一人ござん
すか。

目につきました、目立ちました。他ほかのお客様にはどうであろう

と、この坊ちゃんだけにや飽かしたくない。退屈をさしたくない、三十日なり、四十日なり、打ち通すあいだ来ていただきたい、おもしろう見せてあげたいと、そう思ったがどうしました。……

ほんとうに芸人冥利、みよりこういう御贔屓を大事にするはあたりま当

前えでござんせんか。しのぶも、小稲も、小幾も、重子も、みんな

弟子分だから控えさして、姉さんのをと思つたけれど、私の方が少いからわお対あいて手に似合うというので、私の座蒲団をあげたんで

すわ。何も年増だの、何のつて、貴方に、そ、そんなことを言われる覚えはない！」

と太くいた気色けしきばみ言い開きし。声高なりしを怪あやしみけむ。小稲、小

幾、重子など、狂言ばやし囃子の女ども、楽屋口より出きたで来りて、はら

りと舞台に立ちならべる、大方あかり消したれば、手に手に白と赤との小提灯こちようちん、「て」「り」「は」と書けるを提げひっさたり。

四

舞台なりし装束を脱替えはえたるあり、まだなるあり、烏帽子直しひたた垂れ着けたるもの、太郎冠者たろうかじやあり、大名あり、長上下なががみしもを着たるもの、髪結いたるあり、垂れたるあり、十八九を頭かしらにて七歳ななつばかりのしのぶまで、七八人ぞ立たちならべる。

「どうしたの、どうしたの。」

と赤き小提灯さしかざし、浮足うきあししてソト近寄りたる。国麿の

傍^{わき}に、しのぶの何心なく来かかりしが、

「あれ。」

恐しき顔して睨^ねめつけながら、鼻の前^{さき}にフフと笑いて、

「何か言つてらい、おたふくめ。」

と言棄てに身を返すとて、国曆は太き声して、

「貢！」

「牛若だねえ。」

とて小親、両袖をもてわが背蔽^{せなお}いぬ。

「覚えておれ、鳥居前は安宅^{あたか}の関だ。」

と肩を揺^ゆりて嘲笑^{せせら}える、渠^{かれ}は少しく背屈^{かが}みながら、紅^{くれない}の襦衣^{しやつ}の

袖二ツ、むらさきの帯に突挿しつつ、腰を振りてのさりと去りぬ。

「済まなかったね、みつぎさん、お前さん、貢さんて言うの？」

「ああ。」

「楽屋に少し取込みが有ったものだから、一人にしておいて飛んだめに逢わせたこと。気が着いて、悪いことをしたと思って、急いで来て見るとああだもの。よくねえ、そして、あの方はお友達？」

「友達になれッていうのよ。」

「おや、そう。しない方が可いいよ。可いや厭な人っちゃあない。それ

でもよく蒲団を敷かせないで下すツた。それは私や嬉しいけれど、もしお前さん疵きずでも着けられちゃ大変なのに、どうして、なぜ敷かせてやらなかったの。」

「だッて、あんな汚い足をつけられると、この蒲団が可哀かわいそうだもの。きれいだね、きれいな座蒲団、可愛かわいんだねえ。」

まんなか真中を絞しぼりて、胸むねに抱いだき、斜ななめに頬を押当おしあつるを、小親見て、
あわただ慌わしく、

「あら、そんな事をなすツちや、お前さんの顔に。まあ、勿体ない。」

とて白たなそこき掌ぬぐもて拭ぬぐう真似まねせり。

「あのほんとに、毎晩いらっしやいよ。私もついあんな事を云つたんだから、あの人につけても、お前さんが毎晩来てくれなくツちや極きまりが悪いわ。後生ですよ。その代り、この蒲団は、誰の手も触ふらせないでこうやって、」

二隅を折りて襟をば搔^{かい}あけ、胸のあたりいと白きにその紅^{くれない}を推^お入^{しい}れながら、

「こうやって、お守^{まもり}にしておくの。そうしちや暖^{あつた}めておいて、いらつしやる時敷かせますからね、きつとよ。」

「ああ。」

「ほんとうかい。」

「きつと！」

「嬉しいねえ。」と莞^{にこり}爾として、

「じゃあね、晩^{おそ}くなりましたから今夜はお帰んなさいな。母^{おつかさ}

様^んがお案じだろうから。」

母はあらず。

「母様じゃあないの。伯母さんなの。」

「おや、母様ないの。」

「亡くなったの、またいらつしやるんだツて、皆みんなそう云うけれど、嘘なの。もうお帰りじゃない、亡くなってしまったんだ。」

「まあ。」と言いかけてまたみまも瞻りしが、うなずさま頷く状にて、

「じゃあその伯母さんがお案じだろうから、私が送って行つてあげましょう、ね。鳥居前ツて言うのはどこ？ 待まちぶせ伏をしてるといけな
不可いから。」

「直じき、そこだよ。」

五

「わけ無しだね。ちよいと衣物きものを着替えて来るから待っていていらつしやいよ。小稲さん、遊ばしてあげておくれ。」

「はい。」

ばらばらと女ども五六人、二人を中に取巻きたり。小稲と云うがまず笑いて、

「若お師匠様、おめでとう存じます、おほほほほ。」

小親は素知らぬ顔したり。重子というが寄添いつつ、

「ちよいと、何がおめでたいのさ。」

「おや、迂濶うっかりだねえ。知らないのかい。」

「はあ、何ですか。」

「何ですか存じませんが、小稲さんのいいますとおり、若お師匠様、おめでとうございます。」

傍かたわらより小幾がいう。小松がまた引取りて、

「私もお祝い申しますわ。」

「それでは私も。あの、若お師匠様おめでとう存じます。」

小親は取とり巻まかれてうろうろしながら、

「お前達は何をいうのだ。」

「何でも、おめでたいに違いますもの。」

「姉さん、何なの、どうしたの。」

と差出でて、しのぶの問いければ、小稲は静しずに領かうなずきて、

「お前は嬰ねんねえ児だから解わかるまいね、知らない道理わけだから言つて聞

かせよう、あのね、若お師匠様にね、御亭主だんなさまが出来たの。」

大勢、

「おやおやおやおや。」

小親は顔を赧あからめたり。

「知らないよ！」

小稲また立たち懸かり、

「お秘かくし遊あそばしても不可いけません。そうして若お師匠様、あなたも

うお児こ様が出来ましたではございせんか。」

「へい。」

「何を言うのだね。」

「争われませんものね。もうおなかが大きくおなり遊あそばしたよ。」

「む、これかえ。」と俯向うつむきて、胸を見て、小親は艶あで麗やかに微笑えみを含みぬ。

一同目を着け、

「ほんにね。おやおや！」

「だから、お芽出たかろうではないの。」

「そして旦那様はどなたでございます。」

「馬鹿だねえ、嘘だよ。」

「それでは何でございます、どうしてそんなにおなり遊ばしたの
。」

「何でもないのさ、知らないツて言うのに。」

「いえ、御存じないでは済みません。あなた私たちにお隠し遊ば

しては水臭いじゃありませんか。是非どうぞ、どなたでござい
ますか聞かして下さいましな。」

「若お師匠様、どうぞ私わたくしにも。」

わたくし
「私にも。」

「うるさいね、いまちよいと出懸けるんだから。」

「いえ、お身持で夜あるきを遊ばすのはお毒でございます。それ
はお出し申されません。ねえ？」

「お身体からだに障りましては大変ですとも。どうして、どうして、お
出し申すことではございせんよ。」

「うるさいよ。詰つまらない。」

「じゃあお見せ遊ばせ、ちよいとそのお腹なかンところを、お見せ遊ばせ

。」「

「そうはゆかない、ほほほほ。」

「^{くすぐ}撥りますよ！」

「そうはゆかない、あれ！」

と言うより身^{みぶるい}震せしが、俯^{うつむけ}伏にゆらめく挿^{かんざし}頭、真白^{うなじ}き頸、

手と手の間を抜^{くぐ}けつ、潜^{くぐ}りつ、前髪^{けんぱ}ばらりとこぼれたるが仰^のけざ

まに倒れかかれる、裳^{もすそ}蹴返^{もすそ}し踵^{かかと}を空に、下着^{くれない}の紅宙を飛^とびて、技^{わざ}

利^{さき}のことなれば、二間^{けん}ばかり隔^へりたる舞台にひらりと飛^とび上^{あが}り

つ。すらりと立^たって向直^{むかひ}り、胸^{むね}少し搔^かあけて、緋鹿子の座蒲団の

片端見せて指さしたり。

「稲ちゃん、このことかい。」

「は。」と小稲は前に出でて、

「もうお幾月ぐらい？」

「さようさ、九ツ十……」とばかり、小親われを見てまた微笑みぬ。

六

「さあ、こん度は坊ちゃんの番だよ。」

とて、小稲つツと差寄りつつ、

「坊ちゃん、お相手をいたしましょうね。何をして遊びましょう

。」

われは黙して言わざりき。

「おや、私ではお氣に入らないそうだよ。重子さん、ちよいとお前伺つて御覧。」

「はい。」と進み、「さあお相手。」と言う。

「そんな藪やぶから棒あいさつな挨拶がありますか！」

「おや！ おや！」と退のいたるあと、小松なるべし立替れり。

「私では不可いけませんか。」

「遊ばなくツてもいい。」

「まあ、素氣そつけなくツていらつしやる。」

小稲は笑いぬ。

「坊ちゃん、私にね、そつと内証でおつしやいな、小親さんが、

あの、坊ちゃんに何かいったでしょう。」

「言わない。」

「うまくおっしゃるのよ、可愛い坊ちゃんだって、そういってでしょう。」

「ああ、言った。」

皆どつと笑いたり。

「驚きましたね、そして何でしょう。あの、外の女と遊ぶ事はな
りませんで、そう言やあしませんか。」

さることは聞かざりき。

「そんなこと、言やあしないや。」

「あら、お隠し遊ばすとくすぐ撥りますよ。」

「ほんとう、そんなこと聞きやしない。」

「それじゃ堪忍してあげますから、今度は秘かくさないで有おっしや仰いよ。

あのね、坊ちゃんは毎晩いらっしやいますが、何が第一いっちお気に入ったの。」

「牛若が可いいんだ。そしてお獅子も可いいんだ。」

「じゃあ小親さんが可いいんですね。うつくしいからお気に入ったんでしよう。え、坊ちゃん。」

「立派で可いいんだ。刀さげて、立派で可いいんだ。」

「うそをおっしやい。綺麗だから可いいんですわ。」

「いいえ。」

「だって、それではお能の装束しないでいる時はお気にや入りま

せんか。今なんぎ、あんな、しだらな^{なり}い装をしていたじやありませんか。」

われは考えぬ。いかに答えて可^よからむ。言い損わば笑わるべし。「やつぱり可いんでしょう。ね、それ御覧なさい。美女^{きれ}だからだよ。坊ちゃん^どは小親さんに惚れたのね。」

皆哄と笑う。

「惚れやしない、惚れるもんか。」

「だってお氣に入っただんでしょう。佳^いい人だと思^ううんでしょう。」

「ああ。」

また声をあげて笑いしが、

「じやあ惚れたもおんなじだわ。」

「あらあら、惚れたの、おかしいなあ。」

しのぶ手を拍たたきて遁にげながら言う。

どつ
哄と笑いて、左右より立たち懸り、小稲と重子と手と手を組みつ

つ、下より掬すくいて、足をからみて、われをば宙かに昇ありて乗せつ。

手の空いたるが後あと前に、「て」「り」「は」の提灯ふりかざし、

仮花道より練ねり出いして、

（お手々の手車に誰だれ様乗せた。）

（若いお師匠様さんの婿むこ様乗せた。）

（二階さしき棧敷の坊ちゃん乗せた。）

と口々に唄いつれて舞台を横ぎり、花道にさしかかる。ものうければ下おろせとて、上にてあせるを許さばこそ。小稲はわが顔を仰

向き見て、

「坊ちゃんも何ぞお唄いなさい。そうすると下してあげます。」
止む^やなく声あげてうたいたり。

（一夜源の助がまけたに借りた、）

（負けたかりたはいくらほど借りた。）

（金子^{かね}が三両に小袖が七ツ、）

（七ツ七ツは十四じやあないか。……）

しのぶは声を合せてうたいぬ。

（下谷^{したや}一番伊達者^{だてしや}でござる。）

（五両で帯を買うて三両で絢^くけて、）

（絢目^{くけめ}々々に七房さげて。）

木戸の外には小親ハヤわれを待ちて、月を仰ぎてゐたり。
たたず

夜の辻

一

頭巾着て肩掛シヨオル引ひき絡まとえる小親が立姿、月下に斜ななめなり。横向き
て目迎えたれば衝つと寄りぬ。立並べば手を取りて、

「寒いこと、ここへ。」

とて、左の袖下搔かい開ひらきて、右手めてを添えて引入れし、肩掛シヨオルの

ひだししとと重たくわが肩に懸^かりたり。冷たき帯よ。その肩のあたりに熱したる頬を撫^なでて、時計の鎖輝きぬ。

「向うなの、貢さんの家は。」

衣^{きぬ}ずれの音立てて、手をあげてぞ指さし問いたる。霞ヶ峰の半腹に薄き煙めぐりたり。頂の松一本、濃く黒き影あざやかに、左に傾きて枝垂^{しだ}れたり。頂の元^はげたるあたり、土の色も白く見ゆ。雑木ある処だんだんに隈^{くま}をなして、山の腰遠く瓦屋根^{かわらやね}の上にて隠れ、二町^{ふたまち}越えて、流^{ながれ}の音もす。

東より西の此方^{こなた}に、二ならび両側の家軒暗く、小さき月に霜凍^いてて、冷たき銀敷^{しろがね}き詰めたらむ、踏心地堅く、細く長きこの小路の中を横截^{よこぎ}りて、廂^{ひさし}より軒にわたりたる、わが青楓^{あおかえで}眼前^{めさき}にあ

り。

「あそこ、あの樹のある内。」

「近いのね。」

と歩を移す、駒下駄こまげたの音まず高く堅き音して、石に響きて辻に
鳴りぬ。

「大分おそ晩くなつたね、伯母さんがさぞお案じだろうに、悪いこと
をしたよ。貢さん、直送じきつてあげれば可よかつたのに、早いと人だ
かりがして煩うるさいので、つい。」

「いいえ、案じてやしないよ。遊びに出ていると伯母さんは喜ぶ
よ。」

「どうして？ まあ。」

小親は身を屈かがめてわが耳を覗のぞいて聞く。

「皆みんなで、余所よその叔父さんと、兄さんと、染ちやんと、皆でね、お酒を飲んでそうして遊んでいるの、賑にぎやかだよ。私あたばかり寂しいの、一所に遊びたいんだけれど、お寝、お寝って言うもの。」

小親はまた歩ある行きかけつつ、

「それはね、貢さんが睡ねむがるせいでしょう。」

「そうじやあなくツて、私床あたン中に入いってからね、母おつかさん様が居

なくツて寂しくツて寝られないんだ。伯母さんも、染ちやんも、

余所の人も皆みんなおもしろそうだよ。賑かなの。私一人寂しいんだ。」

「そうかい。」

「鼠が出て騒ぐよ。がたがたツて、……恐こわいよ。」

「まあ。」

「恐かったよ、それでね、私^{あた}い、貰つといたお菓子だの、お煎餅^{せん}だの、ソツと袂^{たもと}ン中へしまつとくの、そしてね、紙の上へ乗せて枕^{まくら}もとへ置いとくの。そして鼠^ねにね、お前、私^{いじ}を苛めるんじやありません。お菓子を遣^やるからね、おとなしくして食べるんだツて、そう云ったよ。」

「利口だねえ。」

「そうするとね、床^{ふし}中で聞いて、ソツと考えているとね、コトコトツてつちや喰べるよ。そうしてちつとも恐くなくなったの。毎晩やるんだ。いつでも来ちやあ食^くべて行くよ。もう恐くはな^ゆくて、可愛らしいよ。寝るとね、鼠^ねが来ないか来ないかと思つて

目を塞い^{ふさ}じやあ待ってるの。そうすると寝てしまうの。目を覚すとね、皆食^{みんな}べて行つてあつたよ。」

われは小親の名呼ばむとせしが猶^{ためら}予いぬ。何とか言うべき。

「ねえ。」

「あいよ。」

「ねえ、鼠は可愛いんだねえ。」

「じやあ貢^{とこ}さん家に猫は居ないのかい。」

「居るよ、三毛猫なの。この間ね、四ツ児^こを産んだよ、伯母さんが可愛がるよ。」

「貢^{ショオル}さんも可愛がつておくれかい。」

われは肩掛^{ショオル}の中に口籠^{くちご}りぬ。袖面^{おもて}を蔽^{おお}いたれば、搔^{かき}分^わけて

顔をば出しつ。^{いだ}冷たき夜なりき。

二

小親の下駄の音ふと止みて、^や取り合いたる掌に力籠りしが、^{こも}後
 ざまに退りたり。^{すき}鳥居の影の横うあたり、^{よこた}人一人立つたるが、動
 き出づるを、それ、と胸轟く。^{とどろ}果せるかな。^{いなご}蠡の飛ぶよ、と光を
 放ちて、小路の月に閃めきたる槍の穂先霜を浴びて、^{やり}柄長く一文
 字に横えつつ、^{よこた}

「来い！」とばかりに呼わりたる、^{よば}国麿は、^{あやう}危きもの手にしたり。
 「何だ、それは何だい。」

われは此方^{こなた}に居て声かけぬ。国麿は路の中央^{まんなか}に突立^{つった}ちながら、

「宝蔵院の管^{くだ}槍^{やり}よ！」

小親は前に出でむとせず、固く立ちて瞻^{みまも}りぬ。

「出て来い、出て来い！ 出て来い！」

といと誇^{ほこり}顔^{がお}にほざいたり。小親わが手を放たむとせず。

「出て来い。男なら出て来い。意^い氣^く地^じなし、女^め郎^{ろう}の懷^はに挟^{はさ}ま

。」

われは振放たんとす。小親は声低く力を籠^こめて、

「いけない、危いから。」

「可^いいんだ。」

「可^いいじゃありません。お止^よし、危ないわね。あんながむしや

らの向うさき見ずは、どんな事をしようも知れない。怪我^{けが}をさしちやあ、大変だから……あれさ！」

「構うもんか、厭^{いや}だ！ 厭だ。」

「厭だつて、危いもの。返りましょう。あとへ返りましょう。大人でないから恐いよ。」

国麿は快げに、

「ざまあ見ろ、女の懷を出られやしまい、牛若も何もあるもんか。」

「厭だ、厭だ、女と一所にや厭だ。放して、放してい。」

「堪忍おし、堪忍おし、堪忍して頂戴、私が悪いんだから堪忍おしよ。」

ひしと抱いだきて引留むる。国麿は背ゆるぎさして、

「勝ったぞ、ふむ、己おれが勝った。貢、汝きさまが負けた。可いか、能のな、能の女は己がのだぜ。」

言棄てて槍を繰り込み、流しりめ晒に掛けながら行ゆかむとす。

「負けない、負けやしないや。」

国麿は振返り、

「それじゃあ来るか。」

「恐かあないや。」

「む、来るなら来い！ 女郎の懷から出て来て見ろ。」

小親あなや啊呀と叫びしを聞き棄てに、振放ちて、つかつかとぞ立出

でたる。背後うしろの女ひとはいかにすらむ、前には槍しごを扱いたり。

「さあ、来い。」

と目の前に穂尖危^{ほさき}なし。顔を背け、身を反^{そら}し、袖を翳^{かざ}して、

「牛若だ、牛若だ、牛若だ。」

「安宅の関だい。」

「何するもんか、突かれるもんか。」

「突くよ、突くよ。芸妓屋^{げいしや}の乞食^つなんか突ついて^は刎ね飛ばさあ

。」

し兼ねまじき氣勢^{けはい}なれば、気はあせれども逡巡^{ためら}いぬ。小親^{うしろ}背後に見てあらむと、われは心に恥じたりき。

「ざまあ見ろ、汝^{きさま}先刻は威張ったけれど、ふ、大きな口よウたた

くなあ、蒲団^{ふとん}に坐つてゐる時ばかりだ。うつくしい蒲団に坐つてゐる

乞食やそんなものか。詰つまらないもんだなあ。乞食、弱虫、背後うしろに
 立つてゐるなあどいつだ。やっぱり乞食か、ええ、意気地が無いな
 。

するりと槍を取直し、肩に立懸け杖つえつきつつ、前に屈かがみて、突つ
 出きいせる胸の紅の襦くれ衣花やかに、右手めてに押広げて拍たたいたり。
 「口惜くやしくばドンと来い！」

三

驚破すわ、この時、われは目を瞑ねむりて、まっしぐらにその手元に衝つ
 入きいりしが、膝を敷いて茫然たりき。

「あれ！」

「危い。」

と国麿の叫びつつ、しばし呆れたる状さましてイみしが、見上ぐるわれと面おもてを合し、じつと互うちに打まもりぬ。

「恐やっしい奴やつだなあ。」

国麿は太い呼吸いきを吻ほとつきて、

「汝きさまの方が乱暴きさまだい。よつぽど乱暴だ、無鉄砲極まらあ、ああ。」
とまた息吐つきつつ、落胆がっかりしたる顔色かおつきして、ゆるやかに踞つくばいたり。

「え、おい、胸でも突かれたら、おい貢、どうするつもりだ。気が短いや、うったぜ。乱暴な。どこだ、どこだ、むむ。」

「痛かあない、痛かあない。」

「む、泣くな、泣いちゃあ不可^{いか}んぜ。ああ、何、袂^{たもと}ツ草^{くさ}を着けと
きやあわけなしだ。」

と槍を落して、八口^{やつくち}より袂^{たもと}の底を探らむとす。暖かき袖口も
て頬^ほの掠^{かすり}疵^{きず}押えたりし小親声を掛けて、

「厭^{いや}ですよ、そんな袂^{たもと}ツ草なんて汚いもの、不可^{いか}ません。酷^{ひど}いこ
とね。もう、灸^{きゅう}のあとさえない児^こに、酷^{ひど}いっちやあない。御覧な
さい、こんなになつたじやありませんか。あら、あら、血が出て、
どうしよう。」

国麿は仰ぎ見て、

「疵は深いかな。酷いかな。」

その太き眉を顰^{しか}めたり。小親は月の影に透^{すか}しながら、

「そんなじゃあないんだけれど、掠^{かす}ったんでしようけれど。」

「じゃあ、何、袂^{たもと}草で治^なツちまあ。」

再びその袂の中探らむとす。

「厭、そんな、そんなものを、この顔に附着^{くつつ}けて可いもんですか

。」

国麿は苦笑して、

「それじゃあそちらで可いようにするさ。ああ、驚いた。」

力なげに槍を拾^{ひろ}うて立ちしが、

「貢、もう己^{おら}あ邪魔あしない。堪忍してやらあ、案じるな。」

と、くるりと此方^{こなた}に背向^{せな}けつつ、行懸^{ゆきか}けしが立ち返りて、円^{つぶら}な

る目に懸念の色あり。またむこう向に身を返して、

「袂ツ草が血留ちどめになるんだ。袂ツ草が血留にならあ。」

聞かすともなく呟つぶやきつつ、鳥居の傍わきなる人の家の、雪垣に隠れしが、二の鳥居の有るあたり、広き境内の月の中に、その姿露あらわれて、長く、長く影を引き、槍重たげに荷にないたる、平たき肩を窄すぼめながら向う屈かがみに背を円くし、いと寒げなる状見さまえつつ、黒き影法師小さくなりて、突つきあたり遥はるかなる、門高き構かまえの内に薄霧籠こめて見えずなりぬ。われはうかうかと見送りしが、この時その人憎からざりき。

「ちよいと、痛むかい。痛むだろうね、可哀相かわいそうに。」

「何ともない。痛かあない。」

「大した事もないけれど、私やもうハツと思った。あの児をつかまえて喧嘩けんかもならず、お前さんがまた肯きかないんだもの、はらはらと思つてる内、もう、どうしたら可いだろう。折角送つて来ながら申訳がないね。」

「可いよ、痛かあないもの。」

「だつて疵きずがつきました。かすり疵でも、あら、こんなに血が出るもの。」

と押拭おしぬぐい、またおしぬぐう。

「もう可い。」

「可よかアありませんよ、このまんまにして、歸しちやあ、私が貢さんのお内へ済まないもの。」

伯母上何をか曰^{のたま}わむ。

四

「じゃあこうしようね、一所に私の家^{うち}へ来て今夜お泊りでないか。そうして、翌^{あす}日になったら一所に行つて言訳をしましょうよ。私でも、それでなきや誰か若い衆^{しゅ}でも着けてあげてね、そして伯母さんにお詫^{わび}をしたら可^いいでしよう。」

「可^いいよ、そんなにしなくツても、一人で帰るよ。」

「だって……困ること。」

「何ともないじゃあないか。」

前さきになりて駈かけ出せば、後より忙せわしく追おい縋すがりて、

「そんなら、まあ可いとして門かどまで送りましょう。だがねえ、可よかつたらそうおしな。お嫌！」

「嫌じゃあないけれど、だって、あの、待ってるから。」

「そう、伯母さんがさぞ、どんなにかね。」

「いいえ、伯母さんじゃあない、姉さんなの。」

「おや、貢さん、姉さんがいらつしやるのかい。」

「宅うちにじゃあないの。むかいのね、広岡の姉さんなの。」

「広岡ツて？」

「継母の内なの。継母が居てね、姉さんが可哀相だよ、
こう言いたる時、われは思わず小親の顔見られにき。」

「あのウ、」

「何。」

「何てそういうおうなあ、何て言うの。あの、お能の姉さん？」

「嫌ですね、お能の姉さんツて、おかしいね、嫌だよ。」

「じゃあ何ていうの。え、どういうの。」

「頭巾の裡うちに笑えみを籠めて、

「私はね、……親ちか。」

「親ちゃん！」

「あい。おほほ。」

「親ちゃん、継母じゃあないの。え、継母は居ないのかい。」

「憂慮きづかわしければぞ問いたる。小親は事も無げに、

「私には何にもないよ。ただね、親方が有るの。」

「そう、じゃあ可いや、継母だと不可^{いけな}いよ。酷^{ひど}いよ。広岡の姉さんは泣いている……」

先よりさまで心にも止めざるようなりし小親は、この時身に沁^しみて聞きたる状^{さま}なり。

「それは気の毒だね。皆^{みんな}そうだよ、継母は情^{なさけ}ないもんだとね。貢

さんなんぎ、まだまあ、伯母さんだから結構だよ。何でも言うことを肯^きいて可愛^きがられるようになさいよ。おお、そういやあほんとうに晩^{おそ}くなつて叱^{おそ}られやしないかね。」

「もう来たんだ。ちよいと。」

手を放すより、二三間駈^{かけ}出して、われはまず青楓の扇の地紙開

きたるよう、月を蔽おほいて広がりたる枝の下にゐたみつ。仰げば白きもの灰見ほのゆる、前さきの日雨ふりし前なりけむ、姉上の結びたまひし折鶴のなごりなり。

打見るさえいと懐しく、退すりて二階なる窓の戸に向いて、

「姉さん、唯ただいま今帰りました。」

と高く呼びぬ。毎夜狂言見に行ゆきたる帰かえりには、ここに來てかくは云うなりけり。案じてそれまでは寝いねたまわす。

しばし音なければ、彼方かなたに立てる小親の方かたを視返みかえりたり。

頭巾深々と被かぶれるが、駒下駄のさきもて、地つちの上叩いて、せわしく低き音刻みながら、手をあげて打ち招く。來よ、もの言わむとする状さまなり。心に懸かりて行ゆかむとする時、静しずかに雨戸の戸一枚ソ

トその半ばを引きたまいつ。

楓の上に明^{あかり}さして、小灯^{こともし}の影ここまでは届かず月の光に消えたり。と見る時、立姿あらわしたまいしが、寝みだれていたまいき。

横顔のいと白きに、髪のかかりたるが、冷き風に揺^{ゆら}ぐ、欄干に胸少しのりかけたまいぬ。

「お帰^{かえり}ですか。」

「唯今。」

「遅かつたから姉さんは先へ寝ていたがね。」

言いかけて四辺^{あたり}を見まわしたまいし。小親の姿ちらりと動きて、ものの蔭にぞなりたる。ふツと灯^{あかり}を吹消したまい、

「お待ちなさいよ。」

五

小親わが方^{かた}に歩み寄りしが、また戻りぬ。内より^{くるる}柩外す音して、
門^{かど}の戸の開^あいたるは、^{あしおと}跫音もせざりしが、姉上の早や二階を下
りて来たまいたるなり。

「……寒いこと。」

羽織の両袖打合せて、^{しずか}静に敷居を越えたまいぬ。

「^{おそ}晩かつたのね。」

「あのね、面白かつたんだよ。」と言いたるが、小さき胸のうち

安からず。目には小親の姿見ゆ。

「それは、好^ようございましたけれど、風邪をひくと不可^いません。あんまり晩くならないうちに、今度からお帰りなさいよ。」

「はい。」

姉上はなお氣遣わしげに、

「そして、まだ内へはお入りでないのでしょうか。」

「まだ。」

しばらく考えたまいしが、

「それではね、私がここに見ていきますからね、貢^{そつ}さん、潜^{そつ}と行つて、あの、格子まで行つて、見て来て御覧。」

深き思いに沈みつつのたまうよう見えたれば、いぶかしさに堪

えざりし。

「どうしたの、私あたの内はどうしたの。」

「いえどうもしませんけれど、少し何んですから、まあ、潜そつと行つて見ていらつしやい。」

果は怖こわ気立ちて、

「嫌だ、恐こわいもの。」

「ちつとも恐いことはない。私がここに見ていますよ。」

われは立放れて拔足しつつ、小路の中を横ぎりたり。見返れば姉上の立ちたまう。また見れば、小親居いどころ処を替えしがなお立てり。

密ひそにわが家の門かどの戸に立寄りぬ。何事もあらず、内はいと静しずかな

り。かかる時ぞ。いつもわが独寝ひとりねの臥床ふしど寂しく、愛らしき、小
 さき獸に甘きうまもの与えて、寝ながらその食くらうを待つに、一室ひとまの内
 より、「丹あおよ、」「すがわらよ。」など伯母上、余所よその客など声
 々に云うが襖ふすま漏れて聞ゆる時なり。今宵こよいもまたしかならむ、と戸
 に耳を附けて聞くに、ただ寂然ひっそとしたれば、可よし、また拔足して
 二足三足ぞ退のきたる。

ど、ど、どツという響ひびき、奥の方騒かたがしく、あれと言う声、叫ぶ
 声、魂消たまぎる声のたちまち起りて、俄にわかにフツと止やみたるが、一文字
 に門かどぐち口より鞠まりのごとく躍り出で、白きもの空くうを駈かけて、むかい
 なる屋根に上るとて、凄すさまじき音させしは、家に飼いたる猫なりき。
 とばかりありて、身を横さまに、格子戸にハタとあたりて、呻うめ

きつつ、片足踏出でてあせれる染をば、追い来し者ありて引ひつとら捉え、
 恐しき声にて叱りたるが、引ひきず摺りて内に入りぬ。咄とつさ嗟の間に、わ
 れ警官の姿を見たり。慌てて引ひつかえ返す、小路のなかばに、小親走
 り来て手を取りつ。手を取られしままに、姉上の立ちたまえる広
 岡の戸口に行ゆきぬ。

三人かくは立たちならびしが、未いまだものいわむとする心も出でず。
 呆れて茫然と其方そなたを見たる、楓の枝ゆらゆらと動きて、大男の姿
 あり。やがてはたと地に落ちて、土蜘蛛つちぐもの縮すくむごとく、円くなり
 て踞うずくまりしが、またたく間ひまに立つよとせし、矢のごとく駈いけ出して、
 曲り角にて見えずなりぬ。

頭巾をば搔かいと取りたる、小親の目のふち紅あかかりき。

「あなた
貴女。」

声かくるに、心着きたまいけむ。はじめて顔を見合せたまいしが、姉上は、いともの静しずかに、

「はい。」

とばかり答えたまう、この時格子の戸颯さと開あきぬ。すかし見る框かまちの上に、片肌脱ぎて立ちたるは、よりより今はわが伯母上とも行交ゆきかいたる、金魚養う女房なり。渠かれは片肌脱ぎたるまま、縄もて後手うしろでに縛いめられつ。門かどに出でし時、いま一人にんの警官後うしろより出でて、毛布けつともてその肌蔽おおいたり。続きて染の顔見ゆ。あとなるは伯母上なりき。

飯小屋

一

樂屋なる居室いままの小窓と、垣ひとえ一重隔てたる、広岡の庭の隅、塵ちりづ
 塚かの傍に横かたわらよこたわりて、丈三尺余、周圍まわりおよそ二尺は有らむ、朽目くちめ
 赤く欠け欠けて、黒ずめる材木の、その本末もとすえには、小さき白き
 苔こけ、幾百ともなく群むらり生おいたり。

指ゆびさして、それを、旧もとのわが家なる木戸の際に、路みちを蔽おおいて繁り
 たりしかの青楓の果はてなりと、継母の語りし時、われは思わず涙ぐ

みぬ。

「この変りました事と云つたら、まるで夢のようで、私わしでさえ門かどへ出ては、時々ぼんやりして見る事がございますよ。ほんに貢さんなんぞ、久しぶりでお帰んなすつたが、ちつとも故郷らしい処はありますまい。」と継母は庭に立ちてぞ語れる。

しかり、町の中にも、隣より高かりし、わが二階家の、今は平家に建直りて、煙草屋たばこの店開かれたり。扇おうぎ折の住みし家は空しくなり、角より押廻せる富家の持地もちじとなりて、黒き板塀建て廻されぬ。

そのあたりの家はみな新木造あらきづくりとなりたり。小路は家を切開きて、山の手の通りに通ずるようなしたれば、人ひと通どいと繁く、

車馬の往来しきり頻なり。

ここに居て遊ぶ小児等、わが知りたるは絶えてあらず。風俗も

また異りて見ゆ。かわわが遊びし頃は、うつくしく天窓あたまそりたるか、

さらぬは切きりかむろ禿すにして皆梳いたるに、今はことごと尽く皆毬栗いがぐりに短く

剪はさみたり。しらくも頭の児こ一人目に着きぬ。

すべてうつくしき女あらずなりて、むくつけなる男ぞ多き。三

尺帶前にしるしばんてん《し》めて、印半纏しるしばんてん着たるものなんと、おさなき

時には見もせざりし。

町もこうは狭からざりしが、今はただ一ひとまた跨ぎ二足三足ばかり

にて、向むかいの雨落あまおちより、此方こなたの溝までわた互るを得るなり。

筋向いなりとわれは覚ゆ。かの石の鳥居まで、わが家より赴く

には、路のほどいと遥はるかなりと思ひしに、何事ぞ、ただ鼻の先なる。
 宮の境内も実まことに広からず、引ひつかか抱かかえて押動かせし百日紅も、肩よ
 り少し上こずえぞ梢なる。仰いで高いかめし厳しと見し国麿が門かどの冠木門かぶきもんも、
 足爪つまだ立つれば脊屈くなり。

さてその国麿はと想おもう、渠かれはいま東京に軍人にならむとて学問
 するとか。烏帽子被えぼしかぶりて、払はたき掉りしかの愛らしき児は、煎餅せんべいをば
 焼きつつありとぞ。物干棹ものほしざお持てりしは、県庁に給仕勤むるよし。
 いま一人にん、また一人、他の一人にはわれ偶ふと通とおりにて出合いたり。
 その時渠は道具屋の店に立ちて、皿茶碗など買うたりき。

皆幸さいわいなるべし。

伯母上はいかにしたまいけむ、もの賭かけて花がるたしたまいた

りとして、警察に捕えられたまいし後、ひととせ一年わが県に洪水ありて、この町流れ、家の失せし時にも何の音おとずれ信も無かりしとか。惟おもうに、身を恥じていずくにか立去りたまいしならむ。かの時の、その夜よより、直ただちに小親に養われて、かく健すこやかに丈のびたる、われは、狂言、舞、謡など教えられつ。さればこの一座のためには益やくなきにもあらぬ身なり。ここに洪水のありし事は、おとし一昨年なりけむ、はたその前さきのなのお前の年なりけむ、われ小親とともに、伊予の国なる松山にて興行せし時間及びつ。かかるべしとは思わでありし、今年またこの地にて興行せむとて、一座とともに来きたりたる八年ぜん前のふるさとを目に見ゆるもの皆かわりぬ。

二

たそがれに戸に出ずる二代目のおさなき児等、もはや野衾のぶすまの
恐おそれなかるべし。旧もとのかの酒屋の土蔵くらの隣なりし観世物小屋は、あ
とも留とどめずなりて、東警察とか云うもの出来たり。

一座が掛かりたる仮小屋は、前に金魚養やいし女房の住みたる家の
あとを、その隣、西の方かた、二軒ばかり空地となりしに建てられつ。
小さき池は、舞台の真下になりたれば、あたかも可よしとて、興行
はじむる時、大瓶おおがめ一個、俯向うつむけて埋うづめたり。こは鼓ねの音おと冴えさ
せむとてしたるなりき。

揚幕より推おしいだ出されて、多勢の見物の見る目恥かしく、しのぶ、

小稲とともに狂言のなかに立^{たちまじ}交りて、舞台に鞠^{まりうた}唄うたいし声の、あやしく震いたるも多^{しばし}日がほどぞ。

振^{ふり}のむずかしき、舞の難き、祭礼に異様な^{まつり}扮装^{いでたち}して大路を練りありくそれとは同じからず。芸に忠にして、技に実なる、小親が世における実^{まこと}の品位は神ありて知りたまわむ、うつくしき蒲団^{ふとん}に坐る乞食よと、人の口さがなく謂^いわば言え。

何か苦しかるべき。この姿して、この舞台に立ちて、われは故^ふ郷^{さと}の知人に対していささかも恥ずる心なかりしなり。

されども知りたるは多からず。小路^{ゆきか}を行交^{いちびと}う市人もすべてわが知れりしよりは著しく足早になりぬ。活計^{たつき}にせわしきにや、夜ごとに集う客の数も思い較^{くら}ぶればいと少し。

物語の銀六は、大和巡^{めぐり}する頃病みてまかりぬ。小六はおいたり。

しのぶも髪結いたり。小稲はよきほどの女房とはなりぬ。

その間、年^{とし}に風雨あり。朝^{あした}に霜あり。夕^{ゆうべ}に雪あり。世の中とか

く騒^{さわ}がしかりければ、興行の収入^{みいり}思うままならで、今年この地に
来^{きた}りしにも、小親は大方ならず人に金借りたるなり。

楽しき境遇にはあらざれど、小親はいつも楽しげなりき。こな
たも姉^{ひと}と思う女なり、姉とも思う人なり。

さりながら、ここにまた姉上と思いまいらせし女^{ひと}こそあれ。

ふる里の空のなつかしきは、峰の松の左に傾きて枝を垂れたる

姿なり。石の鳥居なり。百日紅^{いざな}なり。砂^{いざな}のなかなる金^{こん}色^{じき}の細^{きしや}

なり。軒^{みな}に見馴^なれしと思う蜘蛛の巣のおかしかりし状^{さま}さえ懷

しけれど、最も慕わしく、懐しき心に堪えざりしは、雪とて継母の女むすめなる、かの広岡の姉上なりき。

伯母上にそのあしきことありし時、姉上は広岡の家に來よとのたまいぬ。小親は狂言の樂屋に來きたれと言ひぬ。二人の顔を見かわして、わが心動きしはいずれなりけむ。継母の声したれば、ふと小親のあたたかき肩シヨオル掛の下に、小さきわが身体からだひそみにき。

寂しかりしよ、わかれの時、凍いてたる月に横顔白く、もの憂きことに窶やつれたまいし、日頃さえ、弱々しく、風にも堪えじと見えたまうが、寢ね着姿の肌薄うすきに、折から身を刺す風こがらしなりし。悵ちようぜ然んとして戸に倚よりて遙はるかに此方を見送りたまいし。あわれの涕眼おもかば前さきを去らず、八年永やとせき月日の間、誰たがこの思おもはさせたるぞ。

広岡の継母に、かくて垣越に出会いしは、ふるさとに帰りし日の、二十日過ぎたる夕暮なりけむ。

三

舞台には隣間近なり。ここに居ても、この声の聞えやせむかと、夜ごとに枕を^{そばだ}敬てなどしつ。おもて立ちて訪ずれむは、さすがに^{はばか}憚りありたれば、強いて控えたり。余所^{よそ}ながら姉上の姿見ばやと思ひて、木槿垣^{むくげがき}の有りしあところと思ふあたりを、そぞろ歩^{あるき}行して、立ちて、伺いしその暮方なりき。

ふとこの継母とわれは出逢^{いであ}いつ。

幼おさな顔が

は覚え染そみて忘れざりけむ、一目見るよりわれをば認

めつ。呼懸けられたれば隠れも得えせで、進寄すすりて、二ツ三ツもの
いううち、青楓の枯れたるをはじめとして、継母はいたずらに数
々のその昔をぞ数えたる。

「あんたに面と向うては言いい悪い事じやがの。この楓の樹な、は
や見るたびに腹が立つ。憎いやつで、水の出た時にの、聞いてく
んなされ。

あんたの家うちも、私わし家とこも、同一ひとつに水びたり。根太ねだの弛ゆるんだはお
互様じやが、私わしが家とこなど、随分ずいぶんと基礎とだいも固し、屋根もどつしりな
り、ちよいとや、そつとじや、流れるのじやなかつたに、その時
さの、もう洪水みづが引き際ぎわいというに、洪どうとそれ一瀬ひとせになつて打ぶ着つつか

ると、あんたの内のこの楓の樹が根こぎになつて、どんぶりこと
浮き出いてからに、宅の^{うち}、大黒柱に突き当つたので、それがため
に動き出いて、とうとう流れたというもんじや。ハヤ実に……誠
に、何も何も、それを怨む^{うら}のじやありやせぬけれど、いつまで経^た
つてもこいつの憎いは忘れられませぬ。因つて、お宮様の段にし
がらんで、流れずに残つていたのを、細い処は焼いてしもうたが、
これだけは残しておいて、腹の立つ時は見ています。」

それを楓の知ることか。われは聞くに堪えざれば、冷^{ひや}かに去ら
むとせしが、この継母に、その女の^{ひと}こと、なつかしきわが姉上の
こと問わむと思いたれば堪^{こら}えてゐ^たむ^{たず}。

「そして何か、今あんたは隣に勤めていなさるのかな。」

輕んじ賤むる色はその面に出でたれど、われは逆らわでうなずきぬ。
かの人の継母なれば、心からわれも渠に對しては威なきものとな
れるなるべし。

「うう、何、それでも結構じや。口すぎさえ出来れば、なあ、あ
んた。」

ただ微笑みて見せぬ。姉上のこと疾く語らずや、と思うのみ。

「ええ、ところで、おおそれさ、あんたの一座の中じやそうなの。
ええ、何とかいう、別嬪が一人居なさるそうじやな。何とか言
うたよ。あんた、知つてじやろう。」

と言いかけて少し歩み寄りたり。その不快なる顔、垣の上に又
ト出でて、あたかも梟首せられたるもののごとくに見ゆ。

「小稲ですか。」

「小……稲、いや、違うた。稲じゃない、稲じゃない、はて、何とか言う。」

眉を顰^{しか}めながら顔を斜^{ななめ}にす。太^{いた}く考^さうる状^{さま}なれば、あえてその意を迎えむとはあらねど、かりにもかの女^{ひと}の母なれば、われは遂^{つい}にわが惜しき小親の名語りたり。

「違いますか、小親。」

「うむ、それぞれ、それぞれその小親と言うのじゃ。小親じゃ。」

ははははは。」

蓮葉^{はすは}なる笑声、小親にや聞えむかと、思わす楽屋なる居室^{いま}の方^{かた}見られたり。

継母は憚る状さまなく、

「その小親、と言うのは、あんた、中が好いのかな。」

「何ですね、小母さん。」

四

「はッはッはッ、可愛がられておいでじやろ。私わしは早あんたてのひらが掌てのひらへ乗つかるような時の事から知つとるで、そこは豪えらいもの。顔を見るときちゃんと分ります。可愛がられると書いてある。」

快よからずニタニタ笑いて、

「そしてその小親と云うのは幾歳いくつにおなりだ。はははは、別べつ嬪びん

盛ざかりじやと云えば、十七かな、八ぐらい？」

「いいえ、二十二。」

「む、二十二はちょうどいい。二十二は好い年じや。ちょうどその位な時が好いものじや。何でもその時分さかりが盛じや。あんたも佳い別嬪に可愛がられて羨うらやましいの。いんえ、隠しなざるな、書いてある、書いてある。」

「小母さん、何ですぬ。」

「何でもないが少しその談話はなしがあるで、何じやよ。お前さんはほんとに小児こどもの時から可愛らしかった。色が白くての、ぼちやぼちやと肥ふとつて、頬ほおツペたへ嚙かじりつきたいような、抱いてみたいような、いやもうちよつと見ると目がなくなるくらいじやった。それ

もそうかい、あんたの母^{おつかさん}様はな、何でもこのあたりに評判の
美しい女で、それで優しくつて、穏当で、人柄で、まことに愛くる
しい、人好^{ひとずき}のする、私^{わし}なんか女じやが、とろとろとするほど惚^ほ
れていました。その腹^{おなか}の貢さんじや。これがまた女の中で育つた
というもので申分の無いお稚児様に出来ているもの。誰でも可愛
がるよ、可愛がりますともさ。はははは、内のお雪なんかの、あ
んな内気な、引込思案な女じやつたけれど、もう、それは、あ
んの事と言うたら、まるで狂^{きちがい}気。起きると貢さん、寝ると貢さ
ん、御飯を頂く時も貢さん、何でも貢さんで持切つてな、あんた
がこつちに居なくなつても、今頃はどうしておいでなさるじやろ。
船^{はなし}の談^{はなし}が出りや、お危い。雨が降りや、寂しかろ。人なつツこい

お児^こじやったから、どんなに故郷へ歸りたかる。風が吹けば、風が吹く、お風邪でも召すまいかと、それはそれは言続け。嘘ではない、神信心もしていたようじゃが、しかし大きくおなりで、お達者なように見える。まあ、何より結構。

今では能役者と言うものじゃな。はははは、役者々々。はて、うつくしい、能役者はまた上品で、古風で可^いもんじゃよ。私^{わし}も昔馴染^{なじみ}染じやから、これ深切で言いますが、氣を着けなされ。む、氣を着けなさい、女では失策^{しくじ}るよ。若い時の大毒は、女と酒じゃ。お酒はあがりそうにも見えぬけれど、女には、それ、可愛がられそうな顔^{かおつき}色^{いろ}じゃ。

いんえ、串^{じょうだん}戲^ぎではない、嘘ではない。余^よ所に面白^{おもしろ}いことが

十分あると見えて、それ、たまたまで、顔を見せても、雪の雪ゆの字も言いなさらぬ。な、あの児も、あんたには大きに苦勞をしたもんじやが。

早や懺悔ざんげだと思いなさい。私わしもあの時分は、意地が張つて、根性が悪うて、小児こどもが、その嫌いじやつたでの、憎むまいものを憎みました。が、もう年とし紀も取る。ふツつりと心を入れかえました。優しい女こでの、今もそれ言う通り、あんまりあんたを可愛がるもんじやから、私わしは羨うらやましいので、つい、それ嫉妬やきもちを焼いて、ほんに、貢さんの半分だけなど、私わしを可愛がツてくれたらなど、の、嫉妬の故に、はははは、あんたにも可い顔見せず、あの女こにも辛かったが、みんな貢さん、あんたのせいじや。

ほんに、そのくらいまでに、あんたを思っているものを、何と、貢さん、私の顔を見ながら、お雪はどうした、姉さんは達者かと、一言ぐらいは、何より先に云つてくんなされても可さよそうなものを、小親に可愛がられるので、まるで忘れるとは、あんまりな、薄情だ。芸人になればそんなものか、怨うらじやよ。」

俄にわかに肅しめやかなる言もの語いいぶりなり。

五

その時の我顔を、継母はじつと見しが、俄にわかに笑い出しぬ。

「あの真面目まじめな顔が、ははは、串じょうだん戯ぎじや、串戯じやじや。

何の、そんな水臭い人でない事は、私がちゃんと知っている。

むむ、知つとるとも。

杏や、桃あんずを欲しがった時分とは違うて、あんた色気が着いた。

それでな、旧もとのように、小母さん、姉さんは、と言いい悪い。ところ

ろで、つい、言いそそくれておしまいのである。何、むかし馴染

じやあるけれど、今では女というものが分つたで、女と男、男と

女、女と男ということが胸にあるに因つて、私に遠慮をして、雪

のことをちよつと口へ出し悪い、とまあいうたわけじやの、違

まい。むむ。」

面おもてを背けてわれは笑いぬ。継母は打うちうなず領なづき、

「それ見なされ。そこは何と言うても小母さんじゃ。胸の中は、

ちやんと見通みとおしの法印様。

それで私わしも落着いた。いや、そういう心なら、モチつとも怨みには思いませぬ。どうして、あんたのような優しい児こが、いかに余所よそに良いことが出来たとて、さっぱりふいと、こつちを忘れたさると思やせなんだが、そこは人情。またどうであると思うたで、ちよいと気を引いてみたばかり。

悪く取られては困ります。こんな婆々ばばあが、こんな顔で、こんな怨みつぽい事を言うたとして、何んとも思いはしなざるまいが、何じやよ、雪が逢うてもこう言います。いま私わしの言うたような事を言いますわいの。それはの、言うわけがあるからで。

けれども、あの女こは、じたい、無口で、しんみりで、控目で、

内気で、どうして思う事を、さらけ出して口で云えるような性たちではない。因つて、それ、私わしがの、その心を察して、あの女この代りに言いました。

雪じやと思うて聞きなさい。そこは、私わしがちやんとあんたの胸の裡うちを見透すかしたように、あの女このお腹なかなかも破わつたように知つとるで、つい、嫌味なことを言うたもの。

あんたがそうした心なら、あの女こが何、どうしていようと、風が吹くとも思やせぬ。……泣いていようと、煩つていようと、物も食べられないで、骨と皮ばかりになつていようと、髪髪の毛むしをむしられていようと、生なま爪づめをはがれて焼火箸やけひばしで突かれていようと、乳の下を蹴つけられて、呼吸いきの絶えるような事が一日に二度ぐら

いずつはきつと有ろうと、暗い処に日の目も見ないで、色が真まつさ蒼おになつていようと、踏ふみにじられてひいひい呻うめいていようと：

：そつちの事じゃ、私わしは構かまわぬ。ふむ、世の中にはそんな事もあるものですか、妙だね、ふふふで聞き流いて、お能の姉さんと面白とりげんそうに、お取膳とりげんで何か召あがつておいで遊ばすような事もあるまいと思われる。な、あんた。」

顔の色も変りたるべし。冷たき汗にわが背のうるおいしぞ。黙して聞かるることかは。堪えかねたれば遮りたり。

「姉さんは御機嫌ですか。」

継母は太き声にて、

「はい、生きてはいます。死にはせいで、ああ、息のある内に、

も一度貢さんの顔が見たいと云うての。」

「え！」

「それが、そういう事口へ出しては謂われぬ女^こじゃで、言いはせぬ。けれど、そこは小母さんちゃんと見通し。ま、この大きくおなりの処を見たら、どんなにか喜ぶである。それこそ死なずにいた効^{かい}があると、喜びますじやろ。ああ、ほんとうに。」

「小母さん、逢いたい。」

「む、逢いたい、いや、それは小母さんちゃんと見通し。」

「お目にかかりたい、小母さん。」

「^{もつとも}道理じや。」

「逢わして下さいな。」

と垣に伸上りぬ。継母は少し退りて、
四辺^{あたり}を見まわし、声を潜
め、

「養子がの、婿がの、その大変な男で、
あんたを逢わしたりなん
かしようもんなら……それこそ。」

井筒

一

「貢さん、何をそんなにお鬱^{ふさ}ぎだ。この間から始終くよくよして

おいでじゃないか。言ってお聞かせ、どうしたの。何も私に秘す事は無いわ。」

二三日来、小親われを見ては憂慮きづかいて、かくは問うたりき。心なく言うべきことにあらねば語らでありしが、この夜は渠かれとわれとのみ、傍かたわらに人なき機おりなり。

「私の事じゃないよ。」

「おや他人ひとのことで苦勞してるの、お前さんは生意氣だね。」

と打微笑うちほほえむ。浮きたる事にはあらじ、われは真顔になりぬ。

「だって何も心配をするのは、我身の事ばかりなものではない。

他人ひとのだって、しなきやならない心配ならしうじやないか。お

前さんだって、私のことを心配おしだから、それで聞くんじやな

いか、どうしたツて？」

「はい、はい。沢山^{たんと}心配をしておあげなさいまし。御道理^{ごもつとも}なこ

とだねえ、ほほほ。」

「また、そんな、もう言うまいよ、詰^{つま}らない。」

「ま、承りましょう。可^いいからお話しなさい。大方、また広岡のお雪さんのこツたろう。」

「え、知ってるの。」

^{べにはなぞめ}

「紅花染だね。お前さんの心配はというと、いつでもお極^{きま}りだよ。またどうかしたのかい。」

「ああ、養子が大変だと、酷^{ひど}いんだとき。あの、恐^{おそ}しい継母が、

姉さん、涙を流して、密^{そつ}と話した位だもの。大抵ではないと、そ

うお思い。お雪さんが可哀相っちゃない。ようよう命が有るばかりだと言うんだもの。姉さん、真面目になつて聞いておくれ。いやに笑うねえ。」

「ちつと妬^やけますもの。」

「詰らない、じゃあ言うまい。」

「いいえ承りましょう。酷いかね、養子にや可いのはないものと云うけれど、そっちが酷くツて、こっちが苛^{いじ}められるのは珍しいね。そして、あの継母が着いてるじゃあないか。貢さんに聞いたようでは。養子に我^{わがまま}儘なんかさせそうにも思われないがね。」

われも初めは現^{いま}在小親の疑うごとく疑いたるなり。

「それがね、姉さん、皆^{みんな}金子のせいですとさ。洪^{みづ}水が出て、家^{うち}が

流れた時、旧あつた財産も家も皆なくなつてしまつてね、仕方が無い時にその養子を貰つたんだツて。」

「持参金かね。」

「ええ、大分の高だというよ。初ツからお雪さんは嫌つていた

男だつてね。私も知つてゐる奴だよ。万吉でツて、通の金持の息子

なの。ねえ、姉さん、どういふものか万の字の着いたのに利口な

ものは居ないよ。馬鹿万と云うのがあるしね、刎万だの、それ

から鼻万だのツて、皆嫌な奴さ。ありや名でもつて同じような申

分のあるのが出来るのは、土地に因るんだとね。かえつて利口な

のも有るんだツて。」

「また、詰らないことを言出したよ。幾歳だねえ、お前さんは。」

そんなこと云つていて、人の心配も何も出来るものじゃない。」
「だって、それに違いないのだ。あのお雪さんの養子になつて
のは、やつぱり万という名だからさ。私がね、小さい時、万はも
う大きな身からだをして、良い処の息子の癖に、万金丹売のね、能書のうがき
を絵びらに刷つたのが貰もらいたいつて、革鞆かばんを持つて、お供をして、
嬉しがつて、威張つて歩行あるいた児こだものを。誰が、そんな。

だからお雪さんも嫌つていたんだそうだけれど、どつさりお金か
子ねを持つて来ると言うので、あの継母がね、是非婿にしよう、し
なけりやありませんと、そう云つたんだ、と。お雪さんが嫌だ
と云つたけれど……あの、姉さんも知つてるはずだよ。……私の
内に楓の樹があつて、往来へ枝がさして茂つてたのが、あすこの

窓へ届いたので、内が暗くつて、仕様がな。貢の内へ掛合つて、伐^きらしてしまうと言つた時分に、私は何も知らないけれど、お雪さんが、あれだけは、そんなかわいそうな事をしないで下さい。後生ですつて、止めたんだ。……それがあの洪水^{みず}の時に流れ出して、大丈夫だった広岡の家^{うち}へ衝突^{ぶつ}つたので流れただろう、誰のおかげだ……」

二

「……皆^{みんな}お前のせいじゃないか。あの時伐^きらしてさえおけば、こんなに路頭に立つようになるまで、家^{うち}を流されるんじゃないか」

ツて、難題を言つて、それで、お雪さんも仕方なしに、その養子をしたんだつて。……それが酷^{ひど}いんだ。

こども小児の内は間抜けのようだったけれど、すっかり人が異^{かわ}つて、かんしやくもち癩癩持の乱暴な奴になったと見えるんだよ。……姉さん、年^{とし}紀がゆくと変るものかしら。」

小親は火箸もて炭を挟みたる手を留めて、

「そりや、変るね。貢さんだつて考えて御覧なさい、大そう異^{かわ}つたじゃあないか。」

「私は何、大きくなつたばかりだね。」

「いいえ、ちつと憎らしくもおなりだよ。」

「そうかね。」

「その口だよ、憎らしい。」

「じゃ沢山憎んでおくれ。可いよ、どうせ憎まれツ児だ、構やあしない。」

小親は清しき目を睜りぬ。

「いいえ、可愛がるよ。」

「そんな事いうからだ。今でも皆でなぶって不可い。いろんな事

をいうもんだから、人の前でうつかりした口も利けまいじゃないか。一所に居て、そうして、何も私は姉さんにものを云うのに、遠慮をすることは要らないわけだと思ふけれど、皆がなぶるから、つい、何でも考えてしたり、考えてものを云つたりしなけりやならないよ。窮屈で弱ってしまう。皆がどうしてああだろう。」

莞爾して、
にっこり

「さようでございますね。」

「ほんとうにお聞き、真面目でさ。」

「かしこ畏まりました。」

「そら、そうだから不可いけないよ。姉さん、姉さんというものはね、

年のいかない弟に、そんなことをするもんじゃあないよ。ちゃん

と姉顔をして澄すましていなくっちゃあ。妙にお客あしらいで、私を

ばお大事のもののようにして、その癖ふざけるから、皆みんなが種いろん々な

こと云うんじやアあるまいかね。立派に姉さんの顔をして、貢、

はい、というようにして御覧。おかしなことは無くなるに違いな

いから。そうしてなかよくして、ね、可愛がつておくれ。私も心

細いんだもの。」

いいかけて顔を見合せぬ。小親は炭を継ぎて火箸もて、火をならしながら、ややありて後しめやかに領きたり。秋の末なれば月の影冷かなりし。小親は後むきて其方を見たる、窓少し開きたりしが、見たるまま閉めむともせで、また此方に向きぬ。

「そして、お雪さんはどうしたの。」

「それがね、酷いんだ。他人の口から言つたのなら何だけれど、

あの、継母が我身で我身の邪慳だったことを私に話したんだよ。

そんな風にして、無理に推着けて媚を取らしたが、実は何、路

頭に立つなんて、それほど窮りもしなんだのを、慾張りで、お金

子が欲しさに無理に貰つたが悪いことをしたツて、言うんだ。

それがというと、養子の奴が、飛んだ癩癩持で、別に、他ほかに浮気なんぞするでもなしに、朝から晩まで、お雪さんを苛いじめるんだってね。今まで苛めていた継母さえ見るに見兼ねると云うんだから酷いではないか。ねえ、姉さん。

それに、はじめお雪さんを無理強いにした言草いぐさが、私の内の楓の樹で、それをお雪さんが太く庇ひどつて伐きらさなかつたからこんなことが起つたんだってね、……そしてなぜ楓の樹を伐らさなかつたろう。それは一ツ貢さん、あなたが考えて見ておくれッて継母が言いましたさ。」

煙管きせるをば取りあげつ。小親は煙草たばこの箱弾はじきながら、
「そして。」

「私、考えた。」

三

「何だか分りませんツて、継母には言つたけれど、考えて見ると、何だかねえ、遠い処に、^{かすか}幽に小さい、楓の樹のこんもり葉の繁つたのが見えて、その緑色が濡れているのに、太陽^ひがさして、空が蒼^{あお}く晴れた処に、キラキラとうつくしいものが振^{ぶらさが}下つて……それにね、白い手で、高い処の枝に結^{ゆわ}いつけておいでのお雪さんが、夢のように思い出されるんだよ。だもんだから、何だか私のために、お雪さんが、そんな養子を推着^{おツつ}けられて、酷^{ひど}いめにあわされ

ているようにね、何ということなしに、我身で極めてしまったんだもの。可哀相で堪らないんでね、つい、鬱ぐの。」

言うほどにまた幻見ゆ。空蒼く日の影花やかに、緑の色濃き楓の葉に、金紙、銀紙の蝶の形ひらひらと風にゆれて、差のばしたまう白く細き手の、その姉上の姿ながら、室の片隅の暗きあたり鮮麗にフト在るを、見返せば、月の影窓より漏れて、青き一条の光、畳の上に映したるなり。うつとりせしが心着きぬ。此方には灯影あかく、うつくしき小親の顔むかいあいて、額近きわが目の前に、太く物おもう色なりき。

われは堪えず俯向きぬ。

「そしてまあ、その継母はまた何だって遠まわしに、貢さんのせ

いのように推^{おし}つけて聞かしたんだろうね。お前さんにどうかしてくれろというのかね。貢さん、お前さんが心配をすればどうになるんでもいうような事を、継母が知^とつて言うようにも承^とれるがねえ。一体どうしたというんだろうね。」

小親は身に沁^しみて聞きたりけむ、言う声も落着きたり。

「でね、継母がそういったよ。貢さん、あんたは小親という人に可愛^きがられているんだろうツて。」

「お前さんは、何と言ったの。」

「黙^もっていました。」

「そうかい。」

とばかり寂しく笑いぬ。煙^{きせる}管は火鉢に横^{よこ}うたり。

「どうしたの、姉さん。」

「何、可いいよ。」

「だっておかしいもの、ね、そりや私を可愛がつておくれだけれど……何だか、おかしいなあ。」

「何が、え？ 何がおかしいの。」と口早にいう、血の色薄まぶたく瞼を染めぬ。

「何も気をまわすことはないよ、真面目じゃあ困るわね。私あ何とも思やしない、串じょうだん戲さ。なぜね、そういうことを聞いたら、そりや可愛がつてくれますとも、とうお言いじやないツて云うのさ。串戲だよ、串戲だけれどもねえ、その位にさばけておくれだと、それこそお前さんの言い草ぐさじゃあないが、誰も冷かしたり、

なぶったりなんぞしないようになつちまうわね。え、貢さん、そうじゃないか。しかし不可^{いけな}いかい。」

「だつて極^{きまり}が悪いもの。」

「なぜさ。」

「なぜッて、そう云うとね、他人は何だもの、
姉^{きょうだい}弟だと思わ
ないで、おかしく聞くんだからね。」

「何と聞えるんだね。」

「何だか、おかしい。」

「まあさ、何と聞えるんだねえ、貢さん。」

「それはね、あの……」

「何だね。」

「お能の姉さん。」

「厭いやだよ！」

四

「しかし御察しの可いことね、継母もどうして洒落しやれてるよ。そう云ってくれたのなら、私やその人に礼を言おうや。貢さん、逢つたら宜よろしくと申しておくれ。」

「むこうでもそう云ったよ。小親によろしくツて。」

「何のこツたね。」

「それが、何だって、その養子がね、大層姉さんのことを、美いい

女だつてね、云つてゐるそうだ。」

煙管きせるを落して、火鉢の縁をおさえつつ、小親は新しくわが顔を
瞻みまもりぬ。

「いつか見物をしたんだろうね。」

小親はこれを聞きて笑えみを含み、

「貢さん、もう大抵分つたよ。道理でお前さんは妙な顔をしちやあ、こないだッから私を見ていたんだわ。ああ、そしてお前さんはどう思います。」

「何をさ。」

「何をつて、継母はお前さんに私とながが好いいかツて聞いたろう。」

「そりや聞いたよ。今も話したように。」

「道理で。」

とまた独り^{うなず}頷きつつ、

「貢さん、そして何だろう、お前さんの口から、ものを私に頼んでくれと言やあしないかい。」

「ええ。」

「云つたろうね、ほほほ、解^{わか}つてるよ、解つてるよ。」

とまた笑えり。

「独^{ひとり}で承知をしてるのね、姉さん。」

「うっかりじゃあないわね、可^いいよ、まんざら知らない方じゃあなし、私も一度お目に懸^かつて、優しそうな可^い方だと思つてるも

の。お雪さんがそんな酷いめに逢つていなさるんなら、可いよ、貢さん、お前さんにつけて、その位なことならばしてあげようや。

と静しずかにいう、思いの外なれば訝いぶかりもし、はた危あやぶみもしつ。

「解つてるの。姉さんがどうにかしておくれなら、それを言ぐさにして、不品行ふみもちだからつて、その養子を出してやろう。そんな奴だけれど、ただ、疎そそうがあるの、不遇ぶあしらいをするのツて、お雪さんを苛いじめるばかり。何も良人おととの権だから、それをとやこう言うわけのものではない。他に落度ほかは無いものを、立派な親類が沢山控えているにつけて、こつちから手の出しようがない。そんならつて、浮気などするんじゃない、生真面目きまじめだから手も着けられない

でいたのに、ついぞ無い、姉さんを見て、まるで夢中だから、きつとその何なんだって。そして、どうかしておくれなら、もう一ひととかど廉のものいいがつく。きつと叩き出してお雪さんを助けると継母が云うんだがね。——承知だ、宜しいツて、姉さん、どうして分つたんだね。どうして知つておいでなんだい。」

小親は俯うつむ向きたる顔をあげて、

「貢さん、お前さんは何とも思つちやあいまいけれど、私は何だよ、お前さんの事はというと、みんな夢に見て知ツてるよ。この間だつけ、今だから云うんだがね、真ま闇な処ところでね、あツと云う声が聞えるから、吃びっくり驚して見ると、何だつたの。獣けだもののね、恐ろしいものに追懸おっかけられて、お前さんと、お雪さんと抱き合つて、

お隣の井戸の中へ落^{おっ}こちたのを見て、はッと思つて目が覺めたもんだから。……」

われは悚^{りっせん}然として四^{あたり}辺を見たり。小親は急に座を起^たちしが、衣^{きぬ}の裳^{すそ}踵^{かかと}にからみたるに、よろめきてハタと膝折^ひりたる、そのま^ひま手を伸べて小窓の戸閉^{とぎ}したり。月の明り疊^うに失せて、透^{すき}間^ま洩^もりし木^この葉の影、浮いてあがるようにフト消えて見えなくなりぬ。一^ひ室^{とま}の内^{うち}燈^{ともしび}の隈^{くま}なくはなりたれど、夜の色籠^{こも}りたれば暗かりき。さやさやと音さして、小親は半^{はん}纏^{てん}の襟引合せ、胸少し火鉢の上に蔽^{おほ}うよう、両手をば上げて炭火にかざしつ。

「もつとお寄りではないか。貢さん、夜が更けたよ。」

五

あわせ
裕の上より、ソトわが胸を撫^なでて見つ。

「薄着のせいかね、動悸^{どうき}がしてるよ。お前さん、そんなに思い詰めるものではないわ。そりやお雪さんのことを忘れないで、心配をしておあげなのは、お前さんが薄情でないからで、私だって嬉しいよ。ねえ、貢さん、実のある弟を持ったと思って、人のことに心配をおしの中でも、私は悪い気はしませんよ。けれども、そんなに思い詰めちゃあ、ほんとうに大事な身体^{からだ}をどうおしだえ。気味の悪い夢だったから、心配でならないので、稲ちゃんにもそういつて、しょっちゅう気を着けていたんだもの。人にかくれちゃ、

継母とちよいちよいおはなしのことも知ってるんだよ。こっちから言い出す分ではなかったから、知らない顔で見ていたけれど、^{たま}堪らないほどお鬱^{ふさ}ぎだもの。可^いいよ、もうどうにかしてあげようや、貢さん。」

吐息もつかれ、

「じゃあ、姉さん、あの養子を、だましてくれるの。」

「ま、しようがないわね。」

「だって、酷^{ひど}い奴だというよ。」

「たかが田舎者さ。」

「そして、どうして？　姉さん。」

「狸を御覧よ、ほほ、ほほほ。」

「ああ、一人助かった。」

小親が顔の色沈みたり。

「しかし、貢さん善いことだとは思うまいね。」

胸痛かりし。われは答にためらいたり。

「善いことだとは思うまいね、貢さん。」

その心にわか^{はか}に料りかねたる、胸はまた轟^{とどろ}きぬ。

「私や、芸人でありながら、お前さんに逢つてから、随分大事に身を持ったよ。よ、貢さん、人に後^{うしろゆび}指^さされちゃあ、お前さんの肩身が狭いだろうと思つたし、その上また点を打たれる身になるとね。」

小親引寄せて、わが手を取りたり。

「お前さんは何にも知るまいけれど、どうせ、どうせ、姉の役ツ
きやあ勤まらない私だけれど、姉だツて、よ、姉だツて、人に後
指さされたり、ちつとでも、お前さんとかうやっていることの、
邪魔になるような人が私に有つては厭いやだから、そりや随分出来に
くい苦勞もしたものだ。何にも恩に被きせるんじやあない。怨うらみをいう
んじやあない。不足を云うんじやないけれど……貢さん、広岡の
お嬢さんの顔が見られるようになりさえすりや、私や、私や、ど
うなつても可いのかい。よ、よ、私やどうなつても、可いのかよ
う。」

はげ
烈しく手の震いたればか、何のはずみなりけむ、火箸横に寝て、
その半ば埋うずれしが、見る間に音もなく、ものの動くともなく、灰

の中にとぼとぼと深く沈みたり。

「あら、起しますよ。」

「可いよ。」

わが指のさき少しく灰にまみれたれば、小親手首を持添えて、
たなそこ掌をかえしてじつと見つ。下着の袖口引ひき出いだして払い去るとて、
はらはらと涙をぞ落したる。

わが身体からだの筋皆動きぬ。

「御免なさい。」

小親は涙ぐみたるまま目を睜みはりぬ。

「御免なさい。私が悪かった。」

さしうつむきて声を吞みたり。

「悪かった、姉さん、さげすんでおくれでない。広岡の姉さんも私にやあどんなにか優しくかつたろう。母さんおつかのなくなつた時から、好きな琴弾すきかなくなつておしまいだもの。このくらいな思おもいを私がするの、一度はあたりまえ前だつたと思つて、堪忍しておくれ。悪かつた、ほんとうにさもしいことだつた、姉さん、姉さん。」
こたえなければ繰返しぬ。

「姉さん！」

ひたと寄り添い、肩を抱いだきて、屹きつと顔を見合せぬ。

「あれ！」

と叫いう声、広岡の家より聞えつ。

重井筒

一

井戸一ツ地^{じざかい}境に挟まりて、わが仮小屋にてその半^{なかば}を、広岡にてその半^{ふた}ばを^{こしら}えたりし、蓋は二ツに折るるよう、蝶^{ちよう}番^{うつがい}もて拵^{こしら}えたり。井戸の蓋と隔ての戸とをこれにて兼ね、一方を当てて夜^かごとには彼方^{かなた}と此方^{こなた}を垣^{すき}したる、透間^{すきま}少し有^ありたる中より、奮^はみ^ずたる鞆^{まり}のごとく、衝^つと潜^{くぐ}り出^でて、戸障子^{うちあ}に打^{うち}衝^{あた}る音^{すさ}凄^まじく、室^まの内に躍^はり込^こむよと見えし、くるくると舞^まいて四隅^{しよく}の壁^かに

突当る、出処なければ引返さむとする時、慌しく立ちたるわれに、また道を妨げられて、座中に踞りたるは汚き猫なりき。

背をすくめて四足を立て、眼を瞋らして呻りたる、口には哀れる鳩一羽くわえたり。餌にとて盗みしな。鳩はなかば屠られて、羽の色の純白なるが斑に血の痕をぞ印したる。二ツ三ツ片羽羽たたきたれど、早や弱り果てたる状なり。

「畜生！」

と鋭く叫び、小親片膝立てて身構えながら、落ちたる煙管の羅字長きを、力籠めて掉かぎせし、吸残りけむ煙草の煙、小さく渦巻きて消え失せたり。

「あ痛、あ、あ、痛。」

うつくしき眉を顰めつつ、はたと得物を取落しぬ。

驚きてわが走り寄る時、遁路あきたれば潜り抜けて、猫は飛び出で、遠く走る音して寂然となりたり。

「どうしたんだね、姉さん、どうしたんだね。」

小親は玉の腕投げ出して、右手もて擦りながら肱を曲げ、手の甲を頬にあてて、口もてその脈の処を強く吸いぬ。

「儂麻質かい、姉さん。」

と危ぶみ問いたる、わが声は思わず震いぬ。

「あら、顔の色を変えて、真蒼だね。そんなに吃驚したのかね、気の弱い。」

かえってわれを激ましぬ。

「いいえ、猫にも驚いたけれど、りゆうまちじゃあないかい、え、
倭麻質じゃあないかい。」

「ちよいとだよ。何でもないんだよ、何をそんなに。たかがりゅう
まちだもの、生命いのちを取られるほどのことは無いから。」

「でも、私はもう、倭麻質と聞いても悚然ぞつとするよ。何より恐こわいん
だ。なぜッてまた小六さんのように。」

はりつけ
「磔！」

言いたる小親も色をかえぬ。太き溜ため息いき吻ほとつきて、

「鶴亀、々々。ああ、そういったばかりでも、私や胸が痛いよ、
貢さん、ほんとに小六さんもおしだらうね。」

物語の銀六は、蛇責へびぜめの釜かまに入いりたる身の経験おぼえありたれば、一

たびその事を耳にするより、蒼くなりて、何とて生命いのちの続くべきと、老おいの目に涙うか泛べしなり。されど気丈なる女ひとなれば、今なお恙つつがなかるべし。

小親いまだその頃は、牛若の役勤めていつ。銀六も健かに演劇しばいの真似まねして、われは哀あわれなる鞠唄うたいつつ、しのぶと踊おどりなどしたりし折なり。

あたかもいま小親が猫を追わむとて、煙管かざ翳したるその状さまなりしよ。越前府中の舞台にて、道成寺の舞の半ばに、小六その撞しゅも木を振上げたるトタンに左手ゆんで動かずなり、右手めでも筋つるとて、立たちすくみになりて、楽屋に昇かかれて来きぬ。

しからざりし以前より、渠かれはこの儂麻質の持病に悩みて、仮かりそ

初めなる俚くるまの上下にも、小幾、重子など、肩貸し、腰を抱きなど
せしなり。

月日に痛み重おもるを、苦忍して、強いて装束着けたりしが、その
時よりまた起たたずなりき。

楽屋にては小親の緋鹿子ひがのこのそれとは違い、黒びろうどき天鷲絨ぎぶとんの座蒲団
に、蓮葉はすはに片膝立しゆすてながら、縹子あらの襟着たてじまいたる粗ぬのこき
羽織きりて被きつ。帯も《し》めで、懷ふところ中より片手出して火鉢に
翳うずたかし、烈々たる炭火堆かんきに酒の爛かんして、片手に鼓の皮乾かしなど
したる、今も目に見ゆる。

手の利かねば、割膝にわが小さき体引ひっぱさ挟さみて、洩面つくるが
可笑おかしとて、しばしば血を吸いて、小親来て、わびて、引放つまで

は執念しゅうねく放たざりし寛闊かんかつなる笑声の、はじめは恐しかりしが、
 果は懷はてしくなりて、そと後うしろより小さき手に目隠めかくしして戯れたりし、
 日数ひかずもなく、小六は重き枕に就きつ。

湯を呑むにさえ、人の手かりたりしを、情なさけなき一座の親方の、
 身の代取りしろて、その半不随なかばの身を売りぬ。

買いたるは手品師にて、観世物の碟みせものはりつけにするなりき。身体からだは利か
 でも可よし、槍やりにて突く時、手と足もがきて、苦あと苦痛の声紋こゝろらす
 までなれば。これにぞ銀六の泣きしなる。

「ほんとにねえ、貢さん。」

小親ゆ行きて、泣く泣く小六の枕まくらもと頭にその恐しきこと語りし時、渠かれの剛愎ごうふくなる、ただ冷ひやかに笑いしが、われわれはいかに悲しかりしぞ。

その時の小親、今の年紀としならましかば、断ちても何とか計らいたらむ。あどけなき人のただ優しくて、親方に縋すがりたれど、内に居ては水一つ汲くまぬ者なり。手足の動かぬを何にかせむ、歌妓うたひめにも売れざるを、塵塚ちりづかに棄つべきが、目ざましき大金おおがねになるぞとて、北叟ほくそえみ笑したりしのみ。

そもそも何の見処あなほけうありて、小六にさる価擲あなほけうちけむ、世には賤いやしき業わざも多けれど、誰か十字架はりつけに懸からむとする。

向うづけに屋根裏高きはりつけばしら 磔いまし 柱に縛められて、乳の下ちひら 発きて
 衆ひとの前に、槍をもて貫かるるを。これに甘んずる者ありとせむか、
 その婦人おんないかなるべき。

小六の膚はだは白かりき。色の黒き婦人ものにては、木戸に入るが稀な
 りとて、さる価をぞ払いしなる。手品師せんは詮せんずるに半ば死したる
 小六の身のそのうつくしく艶つやかなりし鳩尾きゅうび一斤の肉を買いしな
 り。諸人もろびとの、諸人の眼の犠牲いけにえに供えむとて。

売られし小六はおさなきより、刻苦して舞を修めし女ひとぞ。かく
 て十年二十年、一座の座頭ざがしらとなりて後も、舞台に烈はげしき働はたらして
 は、楽屋に倒れて、その弟子と、その妹と、その養う児こと、取継
 り立たち蔽おほいて回生剤きつけを吞ませ呼び活いけたる、技芸の鍛錬積りたれ

ば、これをかの江戸なる家元の達人と較^{くら}べて何か劣るべき。

あわれ手品師と約成りて、一座と別れんとしたりし時、扇子もて来よ、小親。一さし舞うて見せむとて、留^{とど}むるを強いて、立たぬ足膝^{いざ}行り出でつ。小稲が肩貸して立たせたれば、手酌して酒飲むとは人かわりて、おとなしく身繕いして、肅然と向直る。

小親は膝に手を置きぬ。

揚幕には、しのぶと重子、涙ながら、踞^{ついで}居て待ちたり。
一息つき、きつと見て、凜^{りん}として、

（幕を！）

と高く声かけぬ。開けと云うなり。この声かかる時は、弟子達みな思わずひれ伏す。威なるべし。

さて声に応じて、「あ」と答え、棒をもて緞子どんすの揚幕キリりと捲まいて揚げたれば、舞台見ゆ。広き土間さじき棧敷風寂さびて人の氣勢けはいもなく、橋がかり艶つやかに、板敷白き光を帯びて、天井の煤影すすかげ黒く映りたるを、小六はじつと見て立ったりしが、はじめてうるめる声して、

(親ちゃん、)

とばかりはたと扇子落して見返りし、凄艶せいえんなる目の中に、一滴の淚宿したり。皆泣伏しぬ。迎むかの俤いくるま来たれば乗りて出でき。

可愛かわゆき児の、何とて小親にのみは懷なつき寄る、はじめて汝なが頬に口つけしはわれなるを、効かいなく渠かれに奪とらるるものかは。小親の牛若ぎやくさこそとならば、いまに見よ、われ癒いえなば、牡丹ぼたんの作つくり物もの

蔽い囲む石橋の上に立ちて、丈六尺なるぞ、得意の赤頭あかがしら
ふつて見せむ。さらば牛若を思いすてて、わが良き児とやならむ
ずらむ。

と病やまいの床に小親とわれと引きつけては、二人の手を取り戯れて、
小親に顔赤うさせし愉快ひとの女は、かくて手品師が人の眼を眩惑げんわく
せしむる、一種の魔薬となり果てたり。

過去りしことありのままに繰返せば、いままのあたり見るに似
たり。

小親と顔を見合せぬ。

「よく覚えておいでだね。」
いかでわれ忘るべき。

三

いかで忘らるべき。時々起る小親が同一病おなやまいの都度、大方ならずわれは胸いためぬ。

殊に今は隣家となりにて、啊呀あなやと一声叫びたまひし姉上の声の、覚え

あるのみならず、猫の不意にも驚かされし、血の動きのなお止やまぬに、小親また腕かいなを痛めたれば、さこそわが顔の色も変りつらむ。

「姉さん、ほんとうに氣を付けておくれ、またこの上お前が病氣にでもなったらどうしよう。」

「案じずとも可いいよ、ちよいとだわ。しかし小六ねえさんもどうして

いるんだろう。始終氣に懸けちゃあいるけれど、まだどうにもしようがないが、もうこの節じゃあ、どこに居なさるんだかそれさえ知れない位だもの、ねえ、貢さん。」

いい掛けつつ打^{うちしめ}湿りて、

「あななぜまあ私達はこうだろう。かわいそうに、いろんなことに苦勞をおしだねえ。」

「仕方がないんだ。」とわれは俯^{うつむ}向きぬ。

「どうしてまた、お前さんを可愛がつてあげたいものは、こんなにふしあわせなんだろうね。小六^{ねえ}さんだつて、あんな氣の強い人だつたけれど、どんなにかお前さんを可愛い、可愛いツて、いつも言つたろう。それがああだし。」

いままたお雪さんだつて、そうじゃあないか。お前さんも恋しがつてるし、むこうでもそんなに思っているものが、飛んだ、お婿さんを娶^とつてまたそうだし……」

小親が口籠^{くちごも}りて吐^つくいきに、引入れらるるよう心細く、

「姉さんは何ともありやあしないだろうね。」

「え。」

「姉さんは何ともなかうね。」

「誰？ え、お雪さんかえ。」

「いいえ。」

「私？」

われ領^{うなず}きぬ。小親は襟^{うなだ}に首垂れつつ、

「私、私なんざあ、どうせやつぱり磔はりつけにでもなるんだろうさ。親方持ちだもの、そりやこうして動いてる内や可いけれど、病氣にでもなった上、永く煩いでもしようもんなら、大概さきが分つてるわね。」

「詰つまらない、そんなことが。」

と勢いきおいよく言いたれど、力なき声なりしよ。

「いいえ、算つもつても御覽、小六ねえさんなんざ、いままでのお礼心で、

据えておいたつて可いんじやあないか。私も世話になつてゐるし、

内のは大抵みんな皆小六ねえさんに仕込まれた女ひとだもの、座をこれまでにし

たのは皆みんなあひとの女の丹精じやあないか。寝さしておいて、謡を教え

さしたつて一ひと廉かどの役には立つのに、お金子かねだといや直ぐあれな

んだもの。考えてみりや心細いよ。」

思わず涙さしぐみぬ。十年の末はよも待たじ、いま早や渠は病
あり。肩寒げに悄れたる、その状ぞ瞻らるる。

「姉さん、私は、私はどうなるんだろうね。」

小親はハツとせし風情にて、顔をあげしがまたうつむきぬ。

「堪忍しておくれ、もう私やそういわれると、申訳のしようがないよ。つい、手前勝手で、お前さんを私が処へ引張っておいて、こんなに甲斐性がないんだものね。あの時お雪さんの方へ行っておいでなら、またこんなことにならなかったかも知れないものを。つい何だか、お前さんをば人ン処へやりたくなかったので、……それも分別がある人なら、そりや、私とお前さんと両方で半

分ずつ悪いんだから可いけれど、東西もお分りでなかったものを、こんなにしてしまつてさ。そして心配をさせるんだから、皆私が悪いんだね、本当に、もうどうしたら可かろうね。」

太く激したるようなりき。さりとは思ひ懸けざりし。心も急ぎ
て、

「何だね、何も、そんな氣で言つたんじやあないんだのに。」

四

「いいえ、お前さんはきつと腹を立つておいでだよ。堪忍して下さい、よう後生だから。毎日々々果敢いことが有るけれど、お前

さんの顔を見たり、ものをいうのさえ聞いてれば、何にも思わな
いで、私や気がはずむんでね、ちつとも苦勞はしないけれど、そ
りや私の、身勝手だった。御免なさいな。」

と身を顫^{ふる}わして涙を呑む。われはその膝おさえたり。

「姉さん、何が気に障りました。何だって、私がそんなこと思
います。宿なしの、我^{わが}ままものを、暑さ、寒さの思いもさせないで、
風邪ひとつおひかせでない。お母^{つか}さんに別れてから、内に居ちや
あ知らなんだ楽しいことも覚えさして下すった。伯母さんと居た
時は、外へばかり出たかったに、姉さんとうち一所になつてから、
ちつとも楽屋の外のことは知らなくって済むようにして、こんな
に育てておくれだもの、何が私に不足があるえ。そりやお雪さん

のことは……何だったから、だから、謝罪^{あやま}ったじゃあないか。先^さ刻^{つき}云ったのはちつともそんな氣じゃありません。何だか心細い事おいしいだから、嘘にもそんなこと云って私を弱らして下さるなつて、そういうつもりだったのに、悪く取ったのかね、まだ胸にやあ済まないかい。」

縋^{すが}りつきで、

「ひがむんだね、ああ、つい、ああもしてあげよう、こうもしてあげて、お前さんの喜ぶ顔が見たいと思うことが山ほどにあるけれど、一ツも思うようにならないので、それでつい僻^{ひが}むのだよ。分りました。さ、分ったら、ね、貢さん、可^いいかい、可^いいかい。」

「ほんとはお前さんが何てつたつて、朝夕顔が見ていたいの。そうすりやもう私や死んだつて怨^{うらみ}はないよ。」

「まあ！」

「いいえ、何の、死んだつて、売られたつて、観^み世物^{せもの}になつたつて、どうしたつて構うものかね。私や、一晩でもお前さんとううしていられさえすりや。」

「そんなこと云^いつちやあ厭^{いや}だ。」

分れて坐したり。

「じゃあ、もう詰^{つま}らない事はいいツこなし、氣をしつかりして、私がきつとお前さんに心配はさせないよ。そのかわり私が煩^{わづ}つて、悲しいめにあうことが——あつたらばね。」

またその声を曇らせしが、

「甘えさしておくれ。可^いいかい。ちよいとでもお前さんに甘えさしてもらいさえすりや、あとはどうなつたつて、構うものか。したいようにするが可^いや。もうもう、取越苦勞なんざしないでおこうね。」

「ああ。」

「極^きめた！」

急に坐り直して、

「あら、もう火が消えたよ。」

小親はいそいそ灰のなか搔^{かい}探^{さが}して、煙管^{きせる}取^とつて上^あげたるが、

ふと瞳^まを定めて、室^まの隅、二ところ見廻したり。

「おや！ 鳩はどうしたろう。」

われもまた心着きぬ。さきに一たび姉上のことを思い断たむとしたりし折、広岡の家に悲しき叫び聞えしは、たしか確に忘れず、その人なりし。われわれとおなじにかの猫の鳩くわえしを見たまいしならむとのみ、仮りに思い棄てたれど、あるいはさもなくて、何等かの憂目うきめに合わせたまうならずや。酷むごき養子のありといえば。また更に胸の安からず。

五

小親はなお頻しきりにあたりを見廻して、

「変だよ、ちよいとお前さんも見たろうね、何だか私や茫然ぼんやりしてたが、たしかあの猫が鳩をくわえて飛込んだっけね。変な気がするよ、つい今しがたの事だった。」

「ああ、私はまた、またいうと何だろうけれど、お雪さんの（あれッ）てった声が聞えたようですね。」

「気のせいだよ、そりや気のせいだろうけれど、はてな、一体どこから飛込んだらうね。」

「井戸の処さ。」

「井戸だえ……」

わが顔の色見て取りたり。小親は寂しき笑えみを含みて、

「可いいよ、どうせ心配をさせないと言ったこツた。貢さん、つい

でにその心配もさせないから、もう案じないが可いよ。」

「何の心配さ。」

「お雪さんのことさ。」

「その事なら、もう。」

「いいえ、そうじゃあないよ、一旦^{いったん}は何、私だって、先刻^{さつき}のよ

うに云ったけれど、お前さんの心配をすることだもの、それに、

どうせ、こんなからだだから、お前さんさえ愛想^{あいき}をお尽^{つか}しでない

ことなら、もうどんなにでも私やなろうわね。構うものかね、な

に構やあしない。」

かかる女^{ひと}に何とてさることをさせらるべき。わが心はほぼ定ま

りたり。

「そんなに云っておくれだと、なお私は立つ瀬がない。お雪さんも何だけれど、※さんが何だもの。」

「何だえ、貢さん。」

「何でもいいよ。」

「可^よかアありません。」

「可かアありませんたつて、何もわるいこつちやあない。」

「じやあまあそうさ。しかしどうにかするよ、私や、そのまんまにしちやあおかないから。」

「あすのこと……そして姉さん冷えちやあまた悪いだろう。」

われは独り自由にものおもわむと欲せしなり。

小親は軽く領^{うなず}きつつ、

「また心配をさしちやあ悪いね。」

「だからさ。」

「あい、じゃあ、お前さんもおやすみだと可い。」

棲つま引合せて立上れり。

「しのぶや、……む、もう寝たそうな。」

戸口にて見返りながら、

「貢さん、床は私が取つてあげよう。」

「なに、構わないよ。あとで敷かせるから。」

打うちうなずきさま微笑ほほえみたり。

「邪魔だったら、あっちへおいで、稲ちゃんと一所に寝ましょう

。」

「のちほど。」

「それじゃあ……」

とて立出でたる、後姿隣の室まの暗きなかに隠れしが、裾花すそやかに足白く、するすると取つて返して、

「貢さん！」

顔をあげてぞ見たる、何をか思える、小親の、憂慮きづかわしげなる面おももち色なりしよ。

「また、鼠とでも話すのかね。」

「考えてるの。」

「そんなこと云わないで、鼠とたんとお楽しみ。ほほほ、私は夢でも見ましようや。」

と横顔見せて身をななめに、此方こなたを見てなお立ちたりしが、ふと心着き耳傾け、

「あら！ 狐が鳴いてるよ。」

と、あだなる声にていいすてつつ、すらすらと歩み去りぬ。

峰の堂

一

あれという声、啊あなや呀と姉上の叫びたまいしと、わが覚ゆる声の、

猫をば見たまいて驚きたまいしならば可^よし。さなくて残忍なる養子のために憂^{うきめ}目見たまいしならばいかにせむ。それか、あらぬかとのみ思い悩^{おなじ}みつ、われは夜半^{よわ}の道を行^ゆくなりき。

小親と同一^{おなじ}樂屋に居て、その顔見つつありては、われ余りに偏して、ただものに驚かせたまいしよと思ひ棄つるようになりがちなればぞ。

窓を透^{すか}して、独居^{ひとり}の時、かの可哀^{あわれ}に苔生^{こけお}いたる青楓の材を見れば、また姉上の憂目を訴えたまいしがごとく思われつつ、心太^{いた}く惑^{つむり}いて脳の苦しきが、いずれか是なる、いずれか非なる。わが小親を売^うりて養子の手より姉上を救い参らせむか、はた姉上をさし置きて、小親とともに世を楽しく送らむか、いずれか是なる、い

ずれか非なる。あわれわれこの間に^{かん}処していか^{こまぬ}にせむと、手を拱^{こまぬ}きて歩^{あり}行くなりき。

しずかに考^{さだ}え決^{さだ}むとて、ふらふらと仮小屋を。小親が知らぬ間に出でて、ここまで来つ。山の手の大通りは寂^{せき}として露^{ひやや}冷かなり。

路すがらいかなるものにか逢いけむ、われは心着かざりし。四^あ

辺^{たり}には人の往來絶^{ゆきき}えて、大路の片隅に果物売の媼^{おうな}一人露店出して

残りたり。三角^{なり}形の行燈^{あんどん}にかんてらの煤^{ばい}煙^{えん}黒く、水菓子と朱

の筆もて書いたる下に、栗^{うづたか}を堆^{みかん}く、蜜柑、柿の実など三ツ五ツず

つ並べたり。空には月の影いと明^{あかる}きに、行燈の燈^と幽^{おずか}なれば、その

果物はみな此^{こなた}方^{ちいさ}より小く丸く黒きものに見ゆ。電信の柱長^{ながめ}く、斜

に太き影の横^{よこ}うたるに、ふと立^{たちどま}停^{また}りて、やがて跨^{また}ぎ越えたれば、

鳥の羽音して、高く舞い上れり。星は降るごとし。あなやと見れば、対岸なる山の腰に一ツ消えて、峰の松の姿見えつ。われは流ながれに沿うたりき。

岸には推おしならべて柳の樹植えられたり。若樹こすえの梢より、老樹おいきの樹この間に、居いどころ所かわるがわる、月の形かからむとして、動くにや、風の風なぎたる柳の枝、下垂れて流れの上に揺ゆめきぬ。

来かかる人あり、すれ違いて振向きたれば、立停りて見送るに、われ足あし疾しばやに通とり過すぎつ。

柳は早うしろの方遥かはるになりて、うすき霧のなかに灰色になりたる、ほのかに見ゆ。松の姿の丈高きが、一ひと抱かかえの幹に月を隠して、途上六尺、隈くま暗く、枝しげき間より、長き橋の欄干低く眺め

らる。板の色白く、てらてらと対^{むかい}なる岸に懸^かりたり。

その橋の上に乗^{うね}りたるよう、上流の流れ疾^とく白銀^{しろがね}の光を浴び、
 蛭^{あお}りに蒼^{あお}みを帯^おびて、両側より枝蔽^{おほ}える木^この葉の中より走り出^で
 て、颯^さと橋杭^{はしぐい}を潜^{くぐ}り抜け、来^こし方^{かた}の市^{まち}のあたり、ごうごうと夜^よ
 深^{ふか}き瀬の音ぞ聞^{きこ}えたる。

わが心は決^{さだ}らで、とこうしてその橋の袂^{たもと}まで来^{きた}りたり。ついで
 なればと思^{おも}いて渡^{わた}りぬ。

木津は柿の実の名所とかや。これをひさぐもの、皆女^{むすめ}にて、市^{いち}
 よりおよそ六七里隔^へたりたる山中の村よりこの橋の上に出^でて来^{きた}る
 なり。夜更^よけては歸^{かへ}るに路^{みち}のほど覺^{おぼ}束^{つか}なしとて、商^{あき}して露店^{あきない}し
 まえば、そのまま寝^ねて、夜明^{よあけ}けてのち里に歸^{かへ}るとか。紫^{むら}の紐結^{ひも}び

つつ、一様に真白き脚^{きやはん}絆穿きたるが、足を縮め、筵^{むしろ}もて胸を蔽い、欄干に枕して、縦横に寝まりたる乙女等五七人、それなるべし。^{ことごと}尽く顔に蓋^{ふた}して、露^{いと}を厭える笠のなかより、紅^{くれない}の笠の紐、二^ふ条^{たすじ}しなやかに、肩より橋の上にまがりて垂れたり。

小親も寝たらむ、とここにて思いき。

二

われは一足立戻りぬ。あれという声、啊^{あなや}呀と叫びたまいし声、いかでそのままに差置きて、小親と楽しく眠らるべき。

いま少し、いま少し、仮小屋と広岡の家と楓の樹と、三ツとも

にある処に、いま少し、少しにても遠く隔りたらば、心の悩まし
さ忘れむ。

渡り越せば、仮小屋とハヤ川一ツ隔たりたり。麓路は堤防と
ならびて、小家四五軒、蒼白きこの夜の色に、氷のなかに凍て
たるが、透せば見ゆるにさも似たり。月は峰の松の後になりぬ。
坂道にのぼりかけつ。頂にいたりて超然として一眸のもとに
瞰下さば、わが心高きに居て、ものよく決むるを得べしと思いて、
峰にのぼらむとしたるなり。

歩を攀ずる足のそれよりも重かりしよ。搔い撫ずる掌を、吸い
取るばかり、袖、袂、太く夜露に濡れたり。

さて暗き樹の下を潜り、白き草の上を辿り行く。峰は近くなり

ぬ。

路の曲りたる角に石碑あり。^{はちす}蓮の花片^{はなびら}の形したる、石の面に、
^{つやこ}艶子之墓と彫りたるなり。

貴き家に生れし姫の、継母に疎んじられて、家をば追われつ。

このあたりに隠れすみて里の子に^{てならい}手習教えていたまいしが、う

らわかくてみまかりたまいしとか、老いたる人の常に語る。^{こけ}苔深

き墳墓の前に、^{ききよう}桔梗やらむ、萩やらむ、月影薄き草の花のむら

^お生いたるのみ。手向けたる人のあとも見えざるに、われは思わす

歩^{とど}を留めぬ。

あわれ広岡の、姉上は、われにいかなる女^{ひと}ぞ。小親をだに棄つ
 れば救わるべきをと、いと強く胸を拍^うつて叫ぶものあり。

草に坐して、耳を傾けぬ。さまざまのこと聞えて、ものの音響
 き渡る。^{つむり} 脳苦しければ、目を眠りて静^{しずか}に居つ。

やや落着く時、耳のなかにものの聞ゆるが、しばし止^やみたるに、
 頭上なる峰の方^{かた}にて清き謡の声聞えたり。

松風なりき。

あまり妙^{たえ}なるに、いぶかしさは忘れたるが、また思い惑いぬ。

ひそかに見ばや、小親を置きて世に誰かまたこの音^{おん}の調をなし得
 るものぞ。

身を起して、坂また少しく攀じ、石段三十五階にして、かの峰
 の松のある処、^{ひぐらし} 日暮の丘の上にぞ到れる。

松には注連繩^{しめなわ}張りたり。香^{こう}を焚^たく箱置きて、地^{つち}の上に円^{まる}き筵^{むしろ}敷

きつ。^{かたわら}傍に堂のふりたるあり。廻廊の右左稻かけて低く垣結いた

る、月は今その裏になりぬ。

謡は風そよぐ松の梢^{こずえ}に聞ゆ、とすれど、人の在るべき処にあら

ず。また谷一ツ^{かなた}彼方に謡うが、この山の端^はに反響^{こだま}する、それかと

も思われつ。試みにソト堂の前^ゆに行きて——われうかがいたり。

伸びあがりて密^{ひそか}にすかしたれば、本堂の傍^{かたわら}に畳少し敷いたるあ

り。おなじ麻の上下^{かみしも}着けて、扇子控えたるが四五人居ならびつ。

ここに謡えるなりき。釜^{かま}かけたる湯の煙むらむらとたなびく前

に、尼君一人^{にん}薄茶の手前したまいぬ。謡の道修^{しゆ}するには、かかる

こともするものなり。覚えあれば、梵^{あしおと}音立ててこの静^{しずか}さ損なわ

じと、忍びて退^のきぬ。

山の端に歩み出でつ。

と見れば明星、松の枝長くさす、北の天にきらめきて、またたき、またたき、またたきたる後、拭^{ぬぐ}うて取るよう白くなりて、しらじらと立つ霧のなかより、麓^{ふもと}の川見え、森の影見え、やがてわが小路ぞ見えたる。襟を正して曰^{いわ}く、聞け、彼処^{かしこ}にある者。わが心さだまりたり。いでさらば山を越えてわれ行^ゆかむ。慈^{いつくし}み深かりし姉上、われはわが小親と別るるこの悲しさのそれをもて、救うことをなし得ざる姉上、姉上が楓のために陥りたまいいしと聞く、その境遇に報い参らす。

明治二十九（一八九六）年十一、十二月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成3」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年1月24日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二卷」岩波書店

1942（昭和17）年9月30日発行

※誤植の確認には、底本の親本を参照しました。

入力：門田裕志

校正：酔いどれ狸

2013年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

照葉狂言

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>